物語

寄本

巳十九

富山縣
地方文庫
東藏書

富山縣文庫

四十九

○河内世二巻名 倉本と号ひ出とハ木のこゝのこひねもいうさひしゝ
一名貝鳥 ゝゝゝ乃工之ゝきてしゝゝゝ
○花 宇治五 寄生ハ哥よゝり詞ハ尺山木よやゝゝゝゝ色とゝりやゝゝ木ハ木のかやと
以ゝの世茉ゝ桑寄生ゝゝゝ楽の木ゝ生ゝ又楓の樹木ゝも生ゝとゝゝさをやゝゝ木ゝ云
ハ木よゝゝゝゝのゝれハ名ゝゝゝていて寶のやゝゝ木よハゝゝゝゝ世董廿歳の夏ゝ廿二
歳の春まゝのゝゝゝ二月直物の次ゝ任大納言兼大将のゝ
○細 巻名以哥号之董廿三歳ゝ廿五歳の年まて三ケ年ゝゝゝゝゝ惣而まゝのゝゝゝ
のゝゝ世椎本のゝゝゝ角総早蕨のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
玉ゝゝの巻も玉ゝゝゝ君四歳乃年ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
浮蛭乃廿二宮ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○ゝの乃浮蛭ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
理大夫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
室ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
若菜上まて左大臣ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ゝゝ東宮と 細 方ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○世ゝやを　細　廿二宮也

○廿二宮と　万水　明石中宮腹の廿二宮なり　紫上の
やうなる也

○ちはやぶるの　巴殿　廿四の父左大臣也　源氏よりも
ろ〳〵かとの威勢なれはあしきまて歴と也

うくもゐのうろふこのあをと
ぶにいそめしをのこころもぐ
さひとりとてんをんとう
づさやまし給てをうるぐば
かちもいとをしくおらをれば
人どもらくしまのよりひ
やまこと也給て　ゆくへを世う
たづひるさきのよてうづさ
やまこと也給よりこの世の
こと也ちはやぶるの世の
のちはこの海ふくもわらく
おとこ　女
おとこのはつさをひいろう

○さゝなみ　或殿　廿四のめのつゝみ

○ゆくへしさ　細　廿四也

○十四よりの殿　細　廿二宮也

○いつゝより　万水　左大臣の先祖ゝの宝物ゝ
ありしを廿二宮の四蒙着よさゝ出ていると
殿也

おもひのこしたるこゝろ
こゝろりふらまこおとなくて
さゝなみ　ゆくへしさ　ゆくへ
つゝみ　ゆくへしさ　ゆくへ
そのこと　ゆくへしさ　ゆくへ
左大臣ふるそふ　ゆくへ
ふるそふ殿　ゆくへ
おとこ　ゆくへ
こゝろ　ゆくへ
もゝ　ゆくへ
まこと　ゆくへ
たゝこゝろ　ゆくへ

○さり出て 巴扱 俗ほさく〳〵しなり也

○世四莫ろ 細 椎本の莫也 董あさとろん
よ宇治へゆさる時分也
或扱 莫 廿三歳なるべし

○心ゑん 或扱 廿二宮の女世四のゑ也

○さろまーき 一万水 さうてもうさ寄る此給廿
のゑをいす

○ろやはまーて 細 廿二宮のゑ也

とうぐあついぐいとるあ
よ 世間をごろものもぬぐひ
ぬくいとろかぐ也うまひ
いろひるくぬぬしさとえん
まもぬぐーるぐころづぐなば
ぬるけーくるつーきころぬい
しーくるこるれば殿上人ども
こよるくさうぐしうべさ四ぎろを
ぬーーさもおやこさるまぐさ
きらの世をおどまで世びやえ
ねるぬーーやはまーてとうれぬん
ちぐころづぐうぬーふぬ

○ぬひてまろ世 万水 廿二宮里よのゑるひーを寄
一垂まて まろ世て 四門目こよるろゑる也

○ろろさ四ろ 孟 世の服装を著ー所体也

いるとろをところあーて ころ
ぐろーくわるれぬぬーわるれ
ばぬぬ世のゑるまーよ世のびて
まろ世をーる世ーるまーゆ
ーるとろ世ぬーて人ぬーろ世ぬ
ぬるぬーふやつまーてるろるこ世
いるぐーるをもぬふわるろるさ
まーろぬーて世ーるろぬ世ゆと
ろーるるびぬーく世世ーり
も今ーるとーるぐやふぬりーる
ぬるろーるこのまーろぬーる世
ろやまーるこんをーる世ぬーぐまーる

○ちうし　細　舅也

○大うしんちうの子　弁左大臣息女垂のかいうぐいさんのうしどうぶ義つぼうのことおどいてうさ世ぶまもてらうりうごとの世ぶがえおりうふもわうどやしぐしあうしんぐをたりしんぐまくよのしぶんもやんをいううろぐうしきとおりめぐきんいうおうしまもやどぶうしんのうしひらやうよおぐわうしもやとからうぐうりうぶまへの前ううひ

○れんしひとう　孟　穀心也

○ううひうそそ　花　古今　秋ちきて時ちに有きれ菊の花ううくうよ色のちきれハ

細　ううひうそそて也

そそぐさうりかうこうぢうこうの乱
文もあれおうちぐうまも
まづこのぶうまうとうう世ぶて着
乃うこうぐやうこうま世ぶうぶいて
へうぐもおかうるうるあうこいうあ
おうこどうちやうこう世ぶうぶこうう
うくおりひきこう世ぶまう
うるぶう世をんうまめぐんん
のりてうやうぶんもうどうあ
ぐうん栄花院の姫うやと家
院うあうぐやうし行ぶおりぶぐ
めぐもうぐ思ぐ思ううぶいハ

○うくハ　或抄　あうくさ也

○栄花院の姫宮　細　廿三宮の例と呂ぶて

○いてやあるとも　細　宮ゐるといあ[illegible]つ
ゐるとあるとも　今ハ人ハ董と廿三宮
もとちがてこれあるもやんてゐる也
ませと

○さてハ　孟　董ハいまハ廿三宮の出進退ろ
ろしそいやうの不慮も出来て世よう
ろしめれ[illegible]とん

○けんとろ世よ　孟　董在世の時董よあハせんと
あ[illegible]めと

いそやあるとも　細　宮ゐるといあ[illegible]つ
ゐるとあるとも　今ハ人ハ董と廿三宮
もとちがてこれあるもやんてゐる也
ませと

○やそのつのて　花　朱雀院の廿三宮を六条
院よのろけ[illegible]のつのて[illegible]ハ今上の廿
二宮を董中納言よあつをまゐ[illegible]ゐわと

○ゐやさちれ　世扱　董ハ宮遷の後見ても可然
と

○[illegible]　弄　ハの人ありとも[illegible]治
大君いまと存生の時世大方ハ人とと[illegible]
廿三宮ゐとまゐりていきてゐつさゐをうちませ
ゐまゐ世也又本董ゐ人さゐ也

○さやうのゐ　細　本董さてさゐてハ叶ゐさと

○さてゐさゐ　或扱　董の本董さてさゐてゐ
さゐさと

○出碁ゐと　花　出門廿三宮の出ゐこ岳垂そ出ゐ人の
菊のさろよ出碁ゐ[illegible]せ[illegible]世
世扱　出門の出ゐいて誰とゐ

ろゐはやでそのほいてゐれ
よこの中納云ろゐふろゐろ
でさんみゐりろ[illegible]ゐさられ
ろろふさふゐでんゐふ[illegible]
もゐ[illegible]ゐわゐでとれろ
ゐり[illegible]ろて[illegible]
ゐどゐまゐ[illegible]ゐてゐ
ほゐゐいさゐのとふても
えゐでさろねさよさゐや
ゐのゐてゐでゐりくゐが
ゐ[illegible]ろ碁ゐでう世扱ひ
ゐ[illegible]ゐふたでれゐうきゐで

○中つきの月と　花　えんつきの月とハ月と中務の月とハ今上の月と也中納言源朝臣ハ董大将也ハ兼ねて人とめと時ハいろの人の官姓とを奏もつる也

○をのしれ　細　勅語也

○あるひるて　花　廿二官ハ毋其の四月ひの月也
るれハ物の音るてハ冷し　似合わぬハ其名を
と也召也　白氏十六云　送春唯有酒　銷日不過
碁子此詩の心をうていろ〳〵日をくられ

よ春のいろもうまぐさちを所
うんじて今ハてこ今歌とう
れくとうを也ハよ中づきの
月こんづきのみこ中所云海の
わうんさぶ毋とうとゆ所て
のあうんこうこめと出ハ也ごく
あうてばいう海てをふてこうう
月ハてい物るもうひあうてを
くうれるまひうてあんよ
てるるき海し海てこの時毋
つひうてうまぐこるるかあうび
るどもを海ぐこうていつまぐ

るんをいろ〳〵人さいこう
○いつつよ日を　河　銷日不加其名　延喜七年
正月三日御記朝覲行幸也大臣ホ日還御時可寂寞
宜圍碁子持懸物有好馬則召碁盤為式部卿
親王与左大臣碁其間御庭別當春野奉鹿
毛御馬立庭中一扃終左大臣勝

○ちきの物　河　賭カケモノ也　或撥　勅語也
花のうちの八碁のうを物也出門ハ所ハ碁子ものを
碁盤ぐ我出ひをめと碁子盤ぐうんと也召
ちうををーさわのめうをれうる也

○こ〳〵心つひ　孟廿二官のうと　美所也

○わうちうさ　或撥　勅言

○所花一枝　花　ちう所花一枝をとうをわうれうち
八のうこうあうる河也　朗詠云鶯行園中花

るをいづこよ田を送ろうこうよ
ものてもこまるんうろうつとて
とだんかしあて所茶のうつきま
相手也
めうをいつもやうはをちうをひ
まうち拾よるひうてあばさまて
八と出よりきの物八有のべきれど
ろぐ〳〵八えうて出ちづきを
とう八までの拾八すう出をうきいで
えいんいづ心づひてきうひ
拾さてこを拾よこうんまうと
ひうれまひを拾のねうきばさ
るとそまづきをおこのうふ一えさ

養艶詣君許折一枝春

。ありて 盃 下殿して菫菊をやりて系也

。世の常の哥 菫也 細 雲上の籬を導く也
或抜 下の心ハ菫の卑下ゝて廿二宮のゝを
辞退ゝる也

。霜よあくす哥 御製 花 延喜ハ集ハ
ゆくれゆくの花ゆくれゝ霜の笹よ殘色ゆ
紙宣集 引ゝて世もへよきゝ松ゆくれゝ花ゝ
ゆの色ハあせもゝあるゝ 今案廿三宮のゝの
むゝきよゝとゝれゝゝゝゝと下の心よりゝ也

きいの心ゝ 細 菫の心ハ色也

。いてやないゝ 細 廿二宮も本意よハゝゝと
ゝゝ宮殿の天君ハ中君をゆゝゝゝゝゝ

ゆゝとゝこの殿ゝゝゝゝゝ
えゝきゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝゝてきゝゝ殿ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
だゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ありしの外 孟芙を聳ぎ〻と夕霧の
ありさまを廿二宮をとあれハ也

○ありくま 或抄 白宮の實てハあらぬ也
さても時節くま六君へ文ある也

○さゝ生 或抄 さもあるハあ生也

○水のもとすり 河 伊勢物語 るそくあやそう
ゆくえうりまぎれ水のしたにむもれひものを
花水のもとすりさハ水濁不通と云本文あるとも
ハ堅密ゝ為てとゝまるゝを云るをしきとハ
品くらべうさくを舞ゝ人ハさゝひ水のもとね
やうあるゝいるゝもこのもとゝ云心也

ようゝゝゝ

○うへのはせと　或抄　はぬ脱屣ある人しとも

○それしも　或抄　うへ人さんとも

○のはしの乃　花　夕霧の御はしは雲井雁と落葉宮とニうさまもてなし給ふる也

○ふいをさて　弄　東宮ゐもとも

○例ゐを　万水　常よりもとなりの給と

うもとこそ世はよりもゆかんよもぎはしりてくるあれて
ゐるはかりとてとあれて
ゐるはかりとてとあれば
いるどとうはあるまじ
まもやしさ世はうんでいと
ゐるうしもるわうしもろ
こゆるもてとうんやとあり
ひはゐるるとうの御のどうろ世見
とをゐる御ゐるしくおがとる
わうさるるれどもよ世はでよ
わもうもんせうもとそんも
わいるうんかどゆうくやがし

○ゐるはかりとて　細　白官の恋也

○とうとうとうれて　弄　夕霧ようとうとうれん
とゐる也

○をとこ世はるる　孟　夕霧ようゐれてハと

○このあせちの大納言　花　按察使大納言世ハ
中君のこと也紅梅巻よりせうととなりてハやまと
と自官のぼりて人也但按察大納言ハ此時左大臣
也然共按察大納言といへる時より兵部卿宮
ハ中君と号ひくをなりてもとの官となる
もろハ物語の作者の約也
或抄　紅梅の四方とハ宰官の四女大納言のも世と
花鳥中君といふ也何

○その年ハ　細　董廿三の年ハ終あるべきの
年よりなる也　或抄　董廿三の年ハ冬〻大君死去也
○廿二宮も四眼　細　董廿四歳の春也

○さもさとて　或抄　董の戸出ハゆるしなん
とも
○ひりくしうるあを　盃をうけとりて八無礼と
芸のんも

ようりうこうなりて　おぼろ
けなるれいの梅香の面云
のことばいの所ことをもるを
おぼしてとて　花紅葉のつせ
ものおひとうていづをを
もゆういおぼされ　うまで
ものこ　ハうの世をもゆ
そめるばいとるにとうハ
もぐりなんさもるいでば
とおぼしたるはきるん
とつぼをゆるんでもあるを
わまりもどうるんもびく

○なるとてハ　弄　何ハ四ゆるしあるてハとて
○なのかとる　巴抄　ろ比と四門ゆるハ定約也

○あてるるるく人　細　宇治大君也

○うくゆりゆく　或抄　大君死後まてうるるて
ハ大さの寄りとハるれぬよ行とてうらを
もてハうるとて不審よるるく也

きうるあげなりるとぼぼ
してうるつきたりてきる
ぼこやるしるゆるくもあるよ
たるきやいるぼてうあんなの
かぼよぼぼーさめたるとて
よもまてこぼくはるまきを
れぼこるのうちゆるるあて
ぼるうくんのあるとまう
るぼさ世ふくぼぼ四まぼくれく
ちぼううくあーはまるくんのは
てうハきすぼふるとてハ四るきん
とるうんぼるくぼのあるる

○ちちはゝ　或抄　浮舟のゝうとゝいひ少し隠意也

○むらあきんちの　河及魂香　前勘

○やんとるゝ　盃　廿二宮也

○花の大いとの　細　夕霧也早蕨巻の八月ゝ
此以下白宮をむこゝとゝへさる

○さいのかゝ　細　中君也

○さきくさ　或抄　以下中君心

○ちちはゝ　或抄　浮舟のゝうとゝいひ少し隠意也
ちゝはゝ　ちゝはゝ　ちゝはゝ　ちゝはゝ　ちゝはゝ　ちゝはゝ　ちゝはゝ　ちゝはゝ

○やそ歌 或抄 なまゝの都にすて又立帰る外なるゝきとゝむ〻らのてゝまてゝのゝ山里に住てんものとゝ

○山ゝの 孟宇治のものゝもれやらんかとゝ

○ゝきはもとゝ 細 古郷のやとりといふ 桐壺の巻ゝ世約あり

○心のゝこれアやゝ 細 心の不動也

河 ゝてゝゝる心也

○今ゝゝゝゝゝ 孟 ゝの今ゝゝゝれゝゝ

ゝゝゝゝ大君ゝゝゝゝゝ

○なよらかなるさま　細　白宮へ入らせ給ふ御さま
とも又せなさるとく

○常ならぬ衰へ　弄　こゝろのなる出来へされ
中君をいと物くるしく思ひ給て也

○例なるぬ　細　懐妊のなる也

○ちらしなし　巴秋　ちくしなる也

○まさきさやうなる　孟　妊婦と白宮の又ちらの秋

○さる人にて　或秋　懐妊の人にてと白宮のひ
給ふなり

○さしらて　万水　中君世房なるとと懐妊とハ
白宮ハ知さぬ也

○八月よ　弄　夕霧の六君ハなる

なんとなどいとうるさくもあるべき
どもあるものなれば物くるしく
さもあるべきもんとしのび
入つゝきもいまちさ海そ
なる程なれハ物くるしもあるを
まちくるしなるつゝの哭
つ嘆のなるべきなること
のなどなのあやまり程なるなのさ
月なるなる例なるべきなるや
そくくもなるなら
くもなるなどかなる程
どなるなるもなるなるといとく

かくうてのこおなるなるとまるべ
さやくなる人のなるなるなるべく
もなるなるなるなるなるなるなる
なるれなるくなるなるなるなるそ
なるなるなるなるなるなるなるなる
しくなるなるなるなるなるなるなる
いくなるなるなるなるなるなるは
なるなるなるなるなるなるなるも
なるなるなるなるなるなるなるく
なるなるなるなるなるなるなる
なるなるなるなるなるなるなる
なるなるなるなるなるなるなる

○あるとんと　細　白宮ハいひ出ていふ也

○それさへ　盃　白宮のけ色ハみと中君ハ根色也

○そのひる　細　以下草子地とハいひていふ

○くもり　細　中君のもり色て後ハ一日の夜れもなくなりハ色也

めをだしたる御ぐしあらうぞつ
へさせ給ふ　ハ　ぞんとおハわね
どいひいそんかどころづ　う
いとをしくおぼされてさもの
給ふなどをぎみもをれさへぐ
ろうくおぼし給ふのびさ
てをもわるど世中をぞ
ふることうのかどるぐぞに
の給ふなてくいぐうあ
ぎんぐうあ給ふのちな
ることをれぐちまう給
てもふるまことふ給

○世ろハとうく　細　うハさんの白宮ぬ心也

○ものそらう　河　ものそりけさと君ろう
ハさて俄ま物と思ふとろう
○さけうさ　細　中君の心也

○いとく句さ　盃　差のさて思心也

○くの心よ　盃　めさくしとる也

とぐとうこのけうを思ぐ
をりうるをおうふいよりひ
給ふんとうぐ給ふ
ワよこのうを給ぐ給ふ
とそまうかぐ給ふ
うあうはをもぐ
ふうのうりひをれ
給べふ給もいとくか
かうぐうかてう給よ
よおうすうやをばあうれハ
おかとともいまうこう
よううぐ給ふうひ

○ふるさと　細　夕霧のわ　ゝ　ゝ　ゝ

ついいすゑ　或抄　中君ハ　の本意なり也

○まつろの心をさて万水　中君と白宮なり也
ハ大君ハゆゑ不めしていろをさて白宮と中君
とあくせもすべし

○めしく河　めしくしく也　花めしくしくと云
羽幻巻ともあり又此巻の下ハ羽ともめしく
わちをそとありわきまへき心なくしし又めてハ
将字也白宮と宇治へつれて出給ふるといふ
ありをまきの巻なあるなり也
也抄　めしくハ女しくさ也

○ろさん　或抄　芸のまくとも号て中君とハ
わんろう有へきなり

○ろのあり所なり　細　ろの時ハ奉公とも今ハの
給ひいつるなり
○ろをあさなる　細　朋友の交心とつくへきなる也
あしきまるる心りちめと浴舟のなるをも
ろろくへくさろる也女の心りちめけくるを
一切のくハ所とくへくさる也

○一ろさよ　或抄　大君のなりけるなりを芸の心ハ
正直なりて一方むきなるなり
○ゆゑくしく　也抄　草子の他也
○めくを　細　大君也
○ろのはむまあ　盃　女二宮のなり

○此君と　細　中君ハ大君のゆうるれハ号ひと
うれうとと

○ととろとと　孟　大君と中君とのすとと芸の
心也

○ととろと人と　細　角総巻よりの

○ととつハ　巴秋　万事号ひ所とすハる芸
中君と号ひるすの相違と無曲と遺言也

ちうもんとやがてをまつるも嫌
しくもあらんどこのうみをえん
もうつどおがゆうとうの月
日ふうつくまるもでうのほん
ゆうとやりふよおりのもれ
がうとうとうとうとうとうと
よもうぐうかくおりのうとう
ちうしものを今ととうとう
しうてもうもうもんをを
とおりつとそうづハおりつ
かうとうもかしうとうのりのを
てしきををがくうのとうん

○やうるうよ　或秋　六君のすり出来て中君の物
号ひるると大君の芸をとうるるとと

○人のうとと　或秋　中君のする芸れ物号と

○るものとうひよ　細　芸の心也

ちちかしうとうとうとうとうとて
この世よりのうるめづさとの名し
ものをおまもうてもうかるる
よつをていいとづしやうの名
ぬうんがばづとうのうるめ
とうとうかしうとうかしうとう
ばのをとおもめのとうとうと
うとめうとうとうとうとうとう
かうとうとうとうとうとうとう
のすとうばよあをもいうをを
くうとうかしうとうのはかも
をのづうとうとうとうばうとう

○うの君さうち　弄　宇治の姫君さうち也

○時代よ　孟　時代うつりかはるゝ（ゆくすえとよ孫
王なるこの女房と女三宮のうさまよりひきの
へる也

○今ハと世と　或抄　是ハまへのよ也

○いてさうを　巴抄　道世なるものかうしまゐるゝと思
ひしと宇治の姫君選よ物ひとりを心ゆる　わたり

きうしあり　かりのやど

○あくるまきさて　花　あさくらハ常なき花の
色なるやあくるまきさてうろひよ　ゆう

○うしを　細　夜明をそうろ次第くる朋行為也

きあづまはどまことのいとうとと
まるもなほしきさつやうのあはれう
ハうの君なきのうどのおもてうまど
きうはのんぐもうはよふはい
つやうつくしうろづうむなる
とまのすうのおとうづのうて
あうもおどいとあうまでいは
ハてうをうきうあれんとう
このへうとうてくしうろ
とあうはづふあうづうのこと
ハあうてきづてんとやうつうろ
づいふううをいできうろく

ヨうこうあづ　ハうもてあう
うかなづつうもづてまどう
きどあうしたよ　ヨうの
まづきうどあいうくあう
うくうとうはふあうづの
ううあどうてまづまうをあを
しふめうまううしはゆう
ヨうきうとうつあうきふも
あうあぬうづうんづうきあう
うかうしもあうづいうあう
よまうつうしはづこのうはの
あううあづうとしづ秋ゆうで

○さてこの院より　河二条院のなり也三条宮より北
なるをハ也

○なやハきのふ　或抄　基の家来衆の事也白
宮ハ禁中より退留と上の詞なり此ハ時く
ゆきのめとそまのうるるなり移てとめうし首尾也

○さうれ　或抄　基の詞なれハさもあらんハあれ
○あのさいはなる　孟中君のれまういと

○色めきて　細　天然の容儀也好色の人ハ似き
ふるとく

ゆ給ふ　ゆ給ふ　ゆ給ふ　

ねくうろ　なりーろ　本霧の立ちくる

○あさまくら　花　まくらハ速也
或抄　古来引哥不叶とうとくら早朝のくら也

○女房の　細　五格子もまいりくるし女房のを
くしもたくるくる
○ありて　細　これより下車しる也
○ひやの　盃　白宮のひろうくくのひく

をんなどもハまどけなくわさい
しはてんかづしつまどかで
うちてきこはばらんしてこの
うねしうるぶれ鈴まどきまぶ
きにうとおりひぐくんうて
中門のあさうろうにんにんぶ
うしどもにんまいうて作るべし
夢のきうひなどゝ作りつとも也
バ　おりてこのまきしなき海く
あるをいう拾へるをこやの盃のびち
こうろうろうろ拾へうちやこうんよ
雪小竹きうろ拾へうりり例のと

○心とあうろう　巳抄　盃の實ろくろう難てかの
ろ

○いとめやち　盃　盃の女房云と心の中よりめ也
○これまこうくと　細　盃の羽也
○うろうにんの　盃　簾外よとうろハいうくと
○くくハいうくハ　弄　内の女房くくと此羽

きうこうる白いうまどがるをうさ
きうハおうすくくうとあまり
おさうろ拾へるくくゆうれるど
あいうおくうこうさんべなどハゆく
あうておどうろうどかあもあうくど
よれ拾ひまりうゆうぶて空て
ねくくあおどすうきうるいうあ
すくくこ巳ふうぶくくゆうも拾
おどいんべくくこうこうれどを
かうこうまのまうよくくうあ也拾
へうこうこうこうふうる金ばくくもん
うこうぶくくあとの拾へうぶくくいうハ

○さて初めて　弄　女房のゆる方也　ゆるゝハ
芙蓉の早下れ初也　初りてむさるゝ
巴秋　是ハ芙蓉の今の座ハ北初りてそなた有るの
注也　うろ古人より初也

○うれしと又　巴秋　中君の心ゆるゝくるとそなた
もとゝく

○初こと　花　あるこゝろ　たとそ　五音通也
或秋　中君ゑ出ぬとくくの下也

○初〳〵　細　男〳〵さ也

○うとてう〳〵　細　中君の心也　ものさも
秋うもうくゝ

はづるんこゆるゐこゝろのてゆど
ゆゝのうしはづ〳〵がうるゝ命ど
のさゝうんゆゐこうるゐやこゝ
どうゐうたしもみてゐこゝうれ
ばうまゝゆるゐゆゐもはうば
てゆどゝよをゝのうるてゆゝし
ばまゝのんづるとゆゝこゝゆど
をゝのゝはゆゐこうるひゆや
ゐうるゆゐゝしゝるゐどゐはゐ
ぬんづるをいゆゝまゆやふ
をゝゆゝゆまゝばゐ海ハうば
かゝゆゐんはゝもゆうゝん

○いるれハ　或秋　中君の病体と芙蓉のしひ
○うゝゝて　盃　中君の返答ゝ
○常ようと　弄　大君のゐと
○こゆやう　細　芙蓉のゝゝゝゝ
の兄者ゝゝ

○ゝえるゝと　細　大君ようゝ似ゝ

つゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
らゝてゆゆれゆひゝうゆゆ
ゝうゆゆるんゝ海ゐいれば
ゆど同ゆゝはどうゝゝゝも
はゝんゝゝゝはゝゝゝゝゝゝ
ゝうゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝしゆゝゝゝよゆゆゝゝ
てゝ海やゐ世伊のゝゝゝゝゝ
をゝゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ところれも引あを盃 的面よりひらきこと

○るとと世中よ巴掛 世上ハ皆物ものるひと
董實さるる心らり也

○くくしき 弄 芝の初

○心う 細るるきるハ大君のるる名ゝき
るハ中君を我りのよりらるる也

○こあや今ゝ 巴掛 官位の望よ物ものとう
らりハあは君るるよ物ものひを付るつこハ物
うんと

○やうくあるえ 巴掛 槿の花ハかくるる物ゝ扇の
上よそろく色ろろるるさ及掛也こ
初心なりろーと

○ろゝくて 弄 芝也 弄ハ君よろゝくて
ろんとろゝ物ゝり 盃 大君ゝ中君とろゝ

よこ物ゆろよ心ゝあえ
ろまゝこんどゝ
きしいやゝもかりくゝ
ゝ物ものこ
ゝ物ゝこんゝこ
もるを世中よるの物ものこ
えあるるゝこつゝあやあんゝ
物ひこゝを物ゝ
ゝこゝこゝこの八物ゝどゝ
よ物ゝこゝあ物ゝくゝ
もてあやゝ物あんあて
ゝゆゝこゝ世ゝこゝ
物ゝをゝこゝこゝ

とゝ物くゝくゝ物ゝひ
をもかゝこゝやとゝゝ物ひ
物ゝこゝくゝ物ゝ
いて大事ゝとゝこゝ
ゝこゝ物ゝこゝ
ゝ物ゝこゝ
ゝこゝこゝ
ゝこゝ
ゝこゝ
ゝこゝ
ゝこゝ

○露と申さん　細蕊の進退に用ゐるといふ
さしうるとも露もろのまゝありとも
○とさかう　細　露ハとさかうる也

○きこえわたる哥　中君也　弄　中君のうた
露ハ中君の身よりゝ消殘る露のとくうさきんゆゝ

○うゆゝ　花　岩波よ松の嵐に音せとハ
何よりわろ花とゝてまゝ　今案世哥の心ハ
ゆるひ侍りとも和貞の哥ハ何よりわろしとあ
ろ同有へしとゝ　すハ露の余れとうるさと何
よりわろしといふ哥ゝよハ可相叶いまゝ不及
管見のいろ也

○秋のゝハ　細　蕊字治へひさ侍るとうろ
侍ゝ　統中腰断是秋天の心あり

○庭もまさも　河古今　里ハあれて人ハあれ
宿るあや庭もまさも秋ぬのゝ

○故院のうせさせ　弄　宇治の宮ぬあれ
つゝて六条院の後とうの院ぬあれとうる
とうう侍ゝ

○世とうむき　花　水原抄云世とうむき侍ゝ
うの院ぬ大ゝ不得其心也不審也ゝ
河海云六条院道世ゝ侍ゝ哥詞ゝ
嵯院ハ桂院ゝ栖霞寺ゝ　今案故院ハ六条院
とゝ彼院夫侍て後二三年ハゝの未世とうむき
侍ゝの院と六条院とゝ
木草の色水ぬ流ゝつゝも涙と催侍ゝ
董大将ゝ其時のうとうゝ故院
上ゝ侍ゝぬてゝの院ゝ隠居ゝ侍ゝ
未ゝ頓滅ゝ侍ゝ心得ゝ侍ゝ
心得ゝ侍ゝ河海ゝ頓滅の説とゝ
ゝ侍ゝて六条院道世ゝ侍ゝ哥詞ゝ

ちるされりゆるさうの院と桂院栖霞寺とのゆ
きてうハ誤也嵯峨院ハ大覚寺と云也大覚寺ハ嵯
峨天皇の離宮にて脱屣の後承和元年より嵯峨
院よりうつり国史よのせたり貞観十八年より
清和太后公家より奏し給て寺よりされて大覚寺
とハ名つけられ行り嵯峨天皇昇霞の後階庭不拂
甚樹木壊しいつる国史よのせたり嵯峨天皇の
嵯峨院よせとのれりしるるとと今六条院乃
ゆるよりさうり更ようこひるさるるくし

。そるるさかしの哀拾 伊氏のわつひし世房
の中品高しみ人なるくし

。山くやしし 哀拾 道世山居るし又さうり
つさてゐ牛へゆうしもわりしし

ハあるうの人いうしもこうあるき人なるくしてはりをきるぐ
はぐひしうの世うきるへぐ
みうろうぐうあぐきうはく
をあくやりひいあつく行あをて
はうるしふいつあうをぐのあが
るぐこぐきてこうあうん
うあくやぐしもうきるあの
やぐしうあうあをせつ山林
より引きぐるぐうあうあ年べよ
りかぐあくはよぐひちる
うをやぐはをれきをうし

。うきれ草 細 愁傷とうきうかとへて
てそ夕霧もうり住ゆくとと
河 毛詩北堂栽萱草能忘憂 世故より萱草
を忘草と云也住吉の岸ハ忘草も世草也今よ
神供を世草とて畏こ

。あいうしハ花 六条院うせゆ時ハ芦天特
いまさいとをうさ時のるり也

ハふかしこそ忘草世草也
この忘の草ぐもりうはぐや
うちあぐもうぐくあの世ハ
ひしふううるあるる
るあふたぐひあうあうあ
ハ忘草しかぐのもぐ月世
ハりひさ海とりのあるるやん
ハ忘草るまぐふぐうあるひぐ
うりりうるん人ぐはしうく
ものんぐあぐもうのいうへまん
ありさいまぐいうひるくはひる
ぐるそいぐうもまるるやは

○ちゝき夢　弄月君のゝ

○あるひとゝ　孟　父公よりうれしう愁も大君のゝ
をるをも同じゝうれしうとうるを憑路ろ
さうその死別れ愁ハ罪なりゝんと

○むりの人と　巴狩　昔をうつさうの人さへ芝の
ゝるをさの体をうそいとゝ

○まいて　我も　細　中君の心

○とうるゝあて　一水　芝よ中君のゝ
さてうるゝさゝと

○世のうさうハ　河古今　山里ハ物のさひし
ゝてそあれ世のうさうハ世人よりまし
弄中君　細　中君ハ山里にて生立給へれハ
世のうさうハ世人ハ世をされハ世人
もるさを唯今世中ハ住給へハ今てそハ世のう
さよりまして山里よりまさ心の出さあるゝ

つゝもやりあかしひくかふ
しく宮のこゝろ人ハ
海とうるかされて
えをのえ給ひ
つるもうひとゝふいとあるを
とやりひうう給世のうさうハ
かゝ人いひをもはやう出ひ
うゝあるこゝんもてにかゝて
うゝ人ハ世ハ作を今ゝん程
いでしづかゝる海そもを
さ海かくやりひ給つるを
ふこゝろかもるかいかゝうを
ハ

○弁の尼ぬし　或抄　弁の尼は宇治よりこなたにて
ある也
○此廿よ日　細　八宮才三年也四年と云説
あり不用之宇治へゆきてあこうまるやと
○あいて　或抄　中君の我と宇治へまゐさせ
給へと白宮へまゐんと思ふと芸へ
ちがふなり
○あるさまと　弁芸の返事宇治宮の
孟　宇治宮をあるさまとあるかめてのぶへ
ともあるこさん往還はいかやとうねまと
○なりひて　或抄　宇治へゆんと思ふへとも
難難の道あれはきまくとおもて月日を
ふるまと

○ひくこはるを　花　宇治の古宮を寺よるをきさ
ふるなり
○ひくこうまる　或抄　是を寺よるをんと云
ふる也
○ひくこくも　孟　中君次才と
○ふるへくん　或抄　中君なりめやうある也
遠慮ふるなりけれと

弁のあまこそうやまくはせ
この世はあまりのかぐはの近
き寺のうねのこゑもちかくさ
ほのかにかすかにはるかに聞
てとまる世ぞてんやうのえき
世ぞやうんやうつくしの所
つぐかくしとやりかとも
いそうかくやすきをもちて
ぶにゆきのかぐわまり
ぬかちのはまいぎりひはま
ん月日もへぐとはこのの
ゆきはのあざりかまるべき

てもこゑのひをぬはりかさ
くこもをそうぬくこゑ
しゆづてようぬぐ見ぬ
よつをてはこうまるめこえ
世あもあるさふつこうあ
さほふなりてこ金とおん
おりひはるをおこいぐ
をぬうんぐもくもさぐ
ぬうんよまこうひてこそ
うんこべうんやうふの所を女よ
うふにぐもうとうぐ
ほうんのこうぬいるまて

。此うへを　弁　中君也
細　故宮の忌日の作善をせさせ給也

。いとあるもしさ　弁　葉の羽

。何ゐをも　孟　六君なるをなりのよるを

。いつこうそも　細　宇治をそもく物へはそもろ
対面ハ有りしる也

ハ侍あなど　まあぐちさろ
てぐもをのし　拾遺　ひぬ
このうへもをしぐ　拾遺　ぬ
あるつぐふをはまく
やをこうあるやとやむ
をはつるきまれいとあ
まぐきまるあをとあぐと
もうあどうあをおぼし
をおどをへやを　白さ
あぐりてんぐまるあつまりを
をれおまわあぐあもとあるぐ
あんありいぞ　あるんをいぐ

。今又　孟　或抄　又やそまりんを
。宮のうもう　孟　白宮也　葉の心

。さつひのへうう　花　侍の別當ハ政所の別當也
右京のかミハ太夫也
。よくまうて　弁　白宮の内より出給ぬとまうて
まりしうもの　孟　葉の用意也

。うちうやまりる　巴抄　白宮今日も退出ハ
東門あんと　葉の　白宮ハ
タつる内より退出あんとまりさうハ
へタつる出あんとて　葉の　白宮ハ

まそもをのあいあるひ
らねむ　拾遺　ぬ
ゆてるんいとみあふもう
りんそうあるあるのあぐ
ゆひあぐれをうあるも
らうそをぐひのぐうあ
右京のかをりてぐまで
ゆうをうあるうて
をおりまをあぐあれば
うちおしふをうあやまる
ぐをのあるぐをへまで

○るとこの　弄中君のをくい也　芳の心

○るとそむくの　巴秋　大君の心ともやゆうて中君
を白宮へゆくての心うつる

○いまさらし　河精進　弄中君よくるれ
てくり精進くら也一而精進とハ心得へくす

○くゝ宮ハ　花　是ハ芳の母宮也

ゆくひるんとゆ世ハさゝ〜ハゲつた
もとて出ぬあををこの世をひ
るき海をきこゆ行ぶ〜ゝ
あどそむくの人の世てゝをさ
てをもて行ぶ〜て　ゆくひぐ海
ふりもんと　ら海ゝこゝろのを
まゝりゆけばなどやんもゆて
ぬゝゝろるゝんとゆりひゝ〜
行ぶのまふゆまごさじて
いゝぐおゝるひをゝをゝ行て
わゝくて行ゝゝゝあハ行いと
ゝゝゝゆどゆのまどけなさ

○いゝ世〜と　河　いゝ世〜もあし　我身とるゝも
くあまのゝゝとゝゆひゝゝ
弄芳の身体とあやゝく道心ありゝゝ行ぶそと
へ行行也
○くゝゝゆゝゝゝハ　巴秋　廿三宮も出家ゝゝ也

○ゆゝくゝゝハ　細　芳の孝心ゆゝゝ道心ゆゝ
さまゝゝも母宮ゝハゝゝゝゝゝゝ

ゆゝゝゝゝゝゝ

○左のおとゝのは六条院の東のおとゝをなんゝとゝつゝしてゝゝ
ゝゝゝ

○女君ハ　孟　中君也

○さてもとゝめぬ　或按　夕霧ゝの使のわゝとゝ
きゝ体ゝてまゝとゝ

○中将のまゝり　細　頭中将也大空の月さへやゝの
哥ハ使也

○今いとゝ　細　白宮の汁

○ひとゝ月か　孟　對月明莫思往事君損顔
色君減年乎天　大さハ月をもめてこゝきゝう
このつれハ人の老とゝりの　ひとゝめて月
ハゝなゝるゝとゝ

○ゝれのゝさゝり　花　二条院のゝんてんゝ白宮ゝゝ
ゝの中君ハ西對ゝ住ゝゝゝゝゝゝゝ

○ゝゝゝ　或按　以下中君の心

○まゝもゝさゝ　花　拾遺　泪川水まゝれしゝ
ゝゝの拙ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○世中ゝ　弄　八宮のゝゝ也

○ゝゝゝゝゝ　或按　宇治ゝゝ　ゝゝ也

なりゝゝ世界ハ日ごろもゝゝゝ
よおゝゝゝゝおゝまでゝゝゝ
あよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なしゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○うちつけ　巴秋　八宮あひ君なり

○人々とも　孟　中君の世よりあるやうなれ人ハ
六君のなり出来ぬるなり

○ひとりさうハ　孟　白宮のなり

○ひさもちなり　弄　中君の心也　父宮あひ君な
りのなりハなれとなんなりなりなりなれ白宮
ハよりれありなれ又とまちなんとなんとまかり
てなり今のなりさやうなりなりいて

○とのつゝ　或秋　中君の我心と与ひなりて
なんなり　もなりさまもとも

どうはあるなりいとなりなりなり
よりなりて世をなりものなり
なりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなり

○をくらもそ山の河古今 我心なぐさめかねつゝ
しるやをくらもそ山なてる月を見て
花 後拾遺 月見てハ誰も心をなぐさまんをく
らもそ山のはるかなる 今案姨捨山の月縁起
和物語ニ季ちかさきゆく都をそをくらもそ山
の月をこゝのかゝるといふなる物なれハ上の句
ハなぐさまんといふなつもそ姨捨山といひつゝ人
ハ身ハ都ニあれども心の中ハなぐさもそ山の月ニ
てなぐさめらゝ 又中君の白宮ニとゝそれる
心をこの山ニなぐさもそ山 弄 なぐさめ
ちハいろくさそ月ろも姨捨山の月なぐさめし

○ちのくれ 細 この椎本ニハるをかゝる也

○山里の哥 中君也 細 白宮のうち捨給ふとい
きこゝろやと哥をよしゝる也

なぐさんこゝをかりつゝよをくらす
をばすて山の月すゝのゝ
乗つゝるまくふゝろづかりひゝ
はしたる 嵐の山ろをもわろ
ましうしろうまこひてぬ
まくらとのゝふるゝうゝやを
さいとゝまゝかしどもひいとも
ぬゝとゝ山ゝの糸のをゝまふ
をゝうてゐぼ

宮のまつのうげゝもうぐり
ゐ月ゝ秋の風をあうりさ
こいをゝをよろゝやゝん

○月ろハ河 後撰 十六 月をうゝて人を見ゝ云
ハいもうりゝとゝ人のゝをれハ讃人不知 独れの
ゝひゝさまゝゝあさゝゝろ月を長いゝそゝ

○ゆゝゝう 細 大君もゝく不食ゝゝうしゝ

○いてやこのゝゝ 細 白宮のゝゝ

○さいゝと 弄 中君ハりゝとりのゝくゝれかゝひ
ゝくゝ也

○今ハいゝもゝく 或抄 恥詮ゝゝもゝくゝも白宮
のゝゝゝとゝうゝゝゝゝ中君の心也

人ゝもゝゝゝゝゝゝゝゝ月
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

。人よいとをし　細　草子地也

。いてや中納言の　盃　まことかしら也

。人のとくせの　巴扇　まことある君のあり
しのとく

。いとこころうし　或扇　中君のうをいとひあり六
君のうへいかにもむ也

いとものくるしけていづくにゐんで
みてこあしかりしかばいかすは
いとをしかりしかりしかりみる
えんとやあんいでやけめ
のさぶらはるはこころづき
をおどろのうへのそばらひ
わるをて人のいとをのわや
うをこころひわるこやは
いとこころづるうかがあ交
ちこさいこころいづであでこと
ぬよりもはるんこころつぎ
さしてえあるどこしあ

。さいとつき　細　六君のけ也

。人のけかと　盃　うへくしくいかとやうさ
のうさ也

。いうるん　弄　白宮のうそく推しふてし
とうり

。さやうる　盃　白宮のさよ六君のけのひらく

。秋のうるれと　花　古今　あうしもいとひを果ら
むうしうめうへうれ秋のうるれは

あらはそうひいうんうさすまら
つもをつうるうのあうさ由もい
おうしううう人のはかどさや
うあつふあどいあてよれで
よあうわひうるうこうしあ
をいうるんかのくさくあがや
てこうるどもをやあうこ
はくあかうふあどやあん
さあんこうこあるづを物で
おが世でさあうるはをうひは
わるやはこうるづをうる
づもはがれうるれ秋のうれ

○うりはそも　或抄　二条院の東對也

○さいのかみ　或抄　白官のあるへき北廂ちの
ト也中君のヲ也
○あり　或抄　弄　白官の心ハ中君をあな
くるしとも

○きたのかた　孟　六君をふたりをれはなんと

○やとりも　或抄　中君へ嫉妬の心あれハ

ど　ようしばらくやすらふ　かたらふ　くあけ
ぬ　そらはてもこゝハふるもえ　ふ
ぬ　ぬ　ぬ　

○あもくゝ　花　ちりかゝるを〳〵人のをりしるべ
とうよりてゝ　ゝ心也
○をとりくのゝ　弄　をゝ〳〵さとをさゝいんの
ゝあよの詞也

○をくゝよ　盂　祈禱也

うらまりやまこゝろをとゞめ
やがてうらみてうらみて
のゝうらもうらみ
ごけやうゝもを
よゝ海やうをてゝ
いひおをうゝ
ゝのゝをやまゝどをゝ
をんあつさがのこゝの
うゝいつゝとゝしさを
ゝもをとをまゝ
ゝをゝさゝをゝ海ゝ
するゝもおやゝうをゝ

○をより　伊都　也拙　誰をも　其人をゝ詞也

○をゝをゝさゝも　細　ゝ實めをゝさゝもゝくゝの
詞りのをゝ　或拙　ゝをゝさハ巧言令色の心也
ゝむをより〳〵　細　中君の心也

○むゝもあやゝう　盂　りをゝやをゝよをゝひゝれ
ゝをゝやて本復せゝを

○いをゝくゝを　弄　白宮の詞也さゝやゝ中君の
いひす　詞〳〵下の心ハをゝをあゝをゝんをゝ

ゝをゝのこゝをゝれさゝあゝ
をゝをゝみのゝくゝをゝあゝを
ゝあんをゝりゝかゝあゝ
ゝををゝゝ
ゝをゝをゝゝ
ゝをゝゝ
ゝをゝゝ

ねれば〳〵やうてとろろ物とうて祈まて
との給ふ　とく〳〵白宮のあつ〳〵ひ給也
○これよりは　世秋　中君よりはねくわしとは
なり〳〵やうて六君とりく〳〵召し〳〵草子地なり
〳〵ろ也なりりまて也されと乃給かとは中君
と白宮とうろうるまして後の世まてちうう
とりきる給と〳〵

○もよ世は　或秋　中君の心
○いのちまつまと　河　ありてはの今まつまのかと
てうう〳〵さるたもるもとうもるる
細　後世まてちう給りとも名世の契は
〳〵ふやうるれは後世とてうのひ〳〵まれと〳〵

○るとうもあよ　河　こうもあよ　こうもあよ名は
〳〵ちわし人〳〵くうわ世うもあ人は
○えもひわ人わ　或秋　心のちうはわ心也
○目つもいて　細　中君の心
○こうれうてはは世秋　堪悲も大うれ時と〳〵
○いてくそひさ　万水　中君の歌也

ひて〳〵ちうわ給
づきうこはうもとかかあ毎人は
あ〳〵〳〵ひあ給ひあをみ
くゆ〳〵さうのとうはうもと
のうちうひ給〳〵給ふ給ふ給ふ
のうちうあうあ〳〵きれと
尺毎ふ給ふうもうもとうもも
あうこうやはの世まてとうひ
はのうはてあつうもあを
やあつもてもはうの世いて
尺ふかうあうちまつまもつさ
ゆうこうは尺こうあはれはなの歌
やたはうあまもあんと給ふよ
てうあをうはうは毎よみもあま
きあはれをはうはうはんはは
うあまとえはひわあはやふ
いうはあはは日はうもはてく
うひうとんこもうはくよう
はふうひまはうつうを毎く
ようひあつひうとうはれは
あうもえはてくはれあうや
こうはまはうあはうはもえうあ
うひ給うあをはうとうはく俗
しとはうひはくはくもひうは給

○さこゆちまくよ　或抄　白宮の詞うひてよとなり

○よのかくよ　巴抄　今夜の間よ中君のおんうち

○夜のまの　細　中君の返事也

○をよあり君や　細　白宮の詞

じたちのてゐしまを行て宮のもと
まくよあくれるゆあり海と
ゐうちをとをぐてうれたこと
たそのおをれかさぐばい夜
のやどまあがうりかうとて
ゐ御神てをうぐとのうひ
ゐへて事のうのうちぐうて
のうへよつまてをくこと
ゆうぬまとてずうりうあ
ぎふわぐれやをかのゆもの
いひやされどまとまれうつよ
らものあをれいたこうやす

○こゑうしく巴抄　偽と詞ようしてゐもと
きりのとく理りとをゆ分別あしとくあさな
うの首尾也

○うし我身よ　細　中君の身れ上をうてもをーハ
うゆ返とく母中宮のうをうをとあゆ返ハ身
を心ともせうろ

○身を心も　河　いるせもいひをうれとうさ
ものハ身を心ともせねようりをう

○をーはうやうう　花　白宮の位うをよつき返
うもあくハ中君を后よをなんと云る也

○ををやとく或抄　即位のうハ白宮れ詞よいひ
うをうさうとく

○いのちはをてを　弄　えをあるれ今心乃よ命
あくハ我やをとろくくやとをわと

○うこよ　細　六君よりの返事也

いをうをとくえりて宮のもも
いとをうろべをうををうひあか
世のをうををうゆ返ら返
うをあうをうをうあれうをう
ゆ身をかをてもをひあうゆ返
身ををうんともせあをさ海
うゆをーをうゆ世もあうべ
人をまをうをうをうぐれを
もをうせをまうべをさ二十をんあう
たんやすくをいうづををもも
あうねべいのうのををれあどの返
をうをををまうゆ返ら四度

○いとしてうるひ　或抄　こるさハちてくちうへき
うるろよ酔て用意もるくまいくろ也

○玉をよろうき　花　後撰　何せんよへしの人ろあ
とうひをんあきろ玉をとろく身うて
今業後朝の文れ使よ録のもうくさねをろ
きうろ也

○いろのかとよ　細　白宮ハいろのかとよ文と
うきてまいうせるうんとと

○さーうをハ　細　さーうろ也うつをの心也

○をうの　或抄　使の用意有きるとく白宮の
ろひ行也

○まく母の人や　弄　落葉宮也内侍のかハ腹れ六君
をやーるひ行ーうハ也

○心やもくて　盃　六君の自筆ゝてるをれい也

○せんーうきうてし　或抄　落葉宮の文れ羽也但
此一句ハ白宮の心ゝ諸抄さうーんとうう文
の羽とあり

○とうんるへし哥　落葉宮也　弄　いるをきをう
とハ落葉宮の六君と人行ろ心也
或抄　霧の置と起別とをうゝり

いとしてうるひすぎうきれがと
うーうるへきこしもとれて
もぎやうふこのみあこ学てよ系
きうあまのうわづーぎあうあ
ものようづきうつきーうをきこの
ううとんぐうらうのかじかをき
うきうんとうろよやようずー
いうをんうーやもあのうらよ
つしづきうのハあうねどきーうこ
うをいくやーうきをすこのうう
うあまうーどうまうきうーうをも
もどいまはうひをれがかをて
ゆみういまををまのかのじくに
ぐてあうきう海よりてあーうそく
ひくやりて川わを行へうふまう
ちくのうあのかてあううとうのき
べ今をきうろやうーて行をれ
行うーせひーうきうてもううあ
くのうどやきうーうきうーうきう
よいくのうーかをきどいとうあまう
ぎあてうん

をうあーうをまでまうう
釣あののうあをれをうあうり
ううるんあてやうかあーううき

○うとく名〻花いまをさきそろ名殘なるこんと
いふ哥のるをといふ
細 白官の詞也此哥ハうとくかなる哥とも
○心やましくて 弄 こゝろ人なるてあまり物とも
○又ゆくゑと 巴扨 草子地の批判也平人ゝを本臺
とゝさ一人をもうとく

○いとゝ〻 万水 白官なるの妻ひとり居給へ
ゝるをとゝつ弁よりあまと有へきなるをとゝ
○もちゝよ 或扨 即位し有へきゆへ人と号へ

○人も此れうさよ
を号へさる也
細 中君のこゝろとハ公卿ゝう
○さいそひなゝ 弄 白官の中君をゝろなるあ
るを業人也をゝといふ
○ゝろゝの 弄 中君乃心也
○あまりよ 弄 白官のなゝ〻行〻也
○うゝふゝろちと 巴扨 拓のゝ也

おもてうごとう海げるもわづ
らやまとこゝろやまとこゝ
なるんとおもふをおりひのか
よもあるめどいのくまでゝ
ゝろとおてさるもづさるのか
おりひあゝひろゝごんのはゝと
ゝやうかゝとのうゝりさるど
もゝろんゝるゝくあまさづ
こゝいとゝゝつゆかゝるづさ
はとおり えあをとさゝゆゝ
はもずゝとふせんおりんあ
れいくゝりもくゝえゝるん

をゝやゝさあるまゝをれゝんも
このれゝをいとおもるどおりひ
ゝゝあるゝべゝゝづゝりものゝし
くゝづさすゝさまゝひてゝゝろ
ゝるゝさゝをゝるなゝどゝるづ
ゝゝとゝるゝさいゝひよおゝゝゝゝと
へはゝゆゝあづゝのゝゝるゝあまり
よおゝゝおゝゝよはふゝゝれ
ゝるゝべゝさゝゝあるゝゝゝふゝ
ゝゝちをいゝあれゝゝわゝゝゝゝゝんの
おりふゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝゝるゝもゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○我身よりてて　盂　中君のたひとりうたと

○ものまいてさるる　或抄　山懐姫ゆへ也

○いとろろよ　盂　不食也

くきやりひしいらぶかをつら
あるまできはさあつうと紙
身よりてでうあふ事もおひ
きて色ひろ文いてひろう
もあれおうちとあろう海よ
あそおしはてびぎものまつ
ぎあろていとわれてでう
あらはてぐあわりを色きさうべ
きんかてことてう色をぶで
てそのうはおしはてどいて
ろうふのあぐしれいみでるき
ぎあるなぎきはおしはよ高

○今めりこふよ　或抄　白官のる也

○物ありくこふへ　細　中君也

○ひろしの河古今　いろしのうこうる人ゐ音
いられたとありあハ山れりきよそありきる

○大りこふ哥　中君也　細　ひりの山里のきすを
うハ大りこふのこうて（こりのとと）

○出ぬるり　巴抄　白宮六君のりへ也

ゆまとかつて寝ぬ一日ろり紙
ぬ色ずしくありてこのそう
ありこうとろあるよ山まりこう
よすこ紙へるはとろるれいを
どしくえんろよよのありて
こうへのはとろのうちかろづよ
あびぐうこまのうぐありり
ろひぐしのあくうるふ山まの
りぐのこうひしくて
ありこふきろ面しあを白ろ
しのあうこうこう秋のうれるか
こうひいまぐみろよいそ高ろ

○あまもいろり　河こひとて音をなくるまハ
ちさとの松ハ下よりあまそいろり

○こしめり　細白宮ゆゑ多くのもとをる

○此うやうこさる　或抄　懐姓のゆ也

○余尺ちさ　弄　母もわゐも早世也其孫也

○えいとつこねく　細懐姓ちそらなるハいろ
ちいとつ

いとこのこゑをこゑつまこふ
あまもつすどりのあつも
とをあづかくこそつかあと
おりふくきこ行つたづわ
うかのおりを世行しめる面
おどをおりいづるもうとも
ものでおりめこのるやまこと
もいろんとすんいづく今
尺ちさうかれいがやからん
はつぐよやとろかくなりるん
ととんとおりつまかやうね
しふくもえいとつよる

○うの日ハ后宮　弄　明石中宮のゆ白宮の六君ゆ
あひ行　三日めのゆ

○ちくハ　弄　夕霧也

○ひろ山車　巴抄　夕霧と業と

○こしひのこしさ　弄　三ケ夜の儀式也

○ちさうあ　巴抄　法度あるひ也

○此君も　弄　業とも聟こと也ひ行こさと

くもあるものをおどいまどろ
まと行くあまふおりひあし
行ゆの日ハ后ゆ母やまぞふ
おつまるとそうもあく寄
行つまこれをおつまを
ぜこしらもおつまを
とそおどちひつまでを行よ
くうゆ納ちのこみりうひやし
行ひてひろ山ろ面まてぞ
行ふくろこしひのぞこ山ろ道
こうをつくんとおどとぐ
どうぐうわんこうちもん

わすれぬるとなり　盃　夕霧と芝と両人兄弟の分也
巴撥此巻は筆法人の心を察してなさる也

○例なすつなき　取撥　芝のやく夕霧のなく
まつりかてなりなり　盃
○人なるよ　盃　六君と芝とをあつかりなと
白宮へなれなるをもなりなりなる也

○とろ心よ　万水　夕霧と芝と

○うまれなりと　盃　夕霧は芝と兄ひなと

○とろめまつせ　弄　三日夜の餅は銀器なる也
○ろろなる　細　草子地

○とんなると　弄　白宮の六君なるよりなりて酒
宴あつへき座へとなく出る也
○小方のはなりなる　細　雲井雁の兄弟也

○なるして出なる　弄　白宮の出なる也

てなるまつまつなる　盃　夕霧のやつまつ
のはなるなるなるなる　盃
すてなるなるなるなる
花なるくのなるなるなる
せなるなるなるなるなる
なるなるなるなるなる
なるなるなるなるなる
なるなるなるなるなる
なるなるなるなるなる
なるなるなるなるなる
なるなるなるなるなる
なるなるなるなるなる
なるなるなるなるなる
なるなるなるなるなる
なるなるなるなるなる

○さうさうもて 弄 盃を持て出る也

○こまつさ 細 前よりこまかなれていとこまかなる物と芸しの所にするの心なるべし

○ほそしとあるてなく之足所也

○されとかしら 弄 芸の尽しを体する也

○ひんかのしらい 弄 芸の出所

○四位六人 花 李部王記 天暦二年十月廿二日丁卯夜詣右丞相坊門家 聚公中廿四日夜更新深

而右丞相亭 中略賜陪従者禄五位三人白草細長各二領袴一具六位有官散位四人各同細長二領無官三人白絹各一疋召継以下銭二方

今案世装束八尋常の装唐衣ホ也細長八貴女着之物也故ヨ別ヨ是とるの也三重の唐衣ハ中倍あると云るや腰ハ小腰引腰也或白或地摺或村濃ホ有差異也

弄 同云裳の腰れもろのいやうなるべきより一答唐衣の色も裳も色くヨ有又織物ハそ穀平絹之次也故ヨ結目ありといふ

○ろのいろ 細 法令の外ヨハ芸くさるもるれハ芸ろ芸と物しの也

○めつさともろり 花 四宮撫 院宮雑事中ハ随身勤夜行召継奏時ハ今案親王家又有召継式部卿重明親王嫁娶之時召継以下銭二方と禄ヨ所ら上の記ヨ見ともり白宮の中ヨも是ヨ見ともるべし又知足院禅閤院の中猫子として召継と具せるもありしも之ハ所廃舎人也或撫 召継舎人ヨ至て八定とる法令なきゆへよりりくせれるる也

草子地

ふかさ風いとこまかなるこうちをあるべのうへのはねさうづさきもてはぐいまいつづくの所うつをはなてびとてびまつ所中納言のいとすあ所へるかえすてかろことのつとづつうさとうをとうさうとうさのていひをはぐいづるあうう花ぐあらあやこていとまあり。ひんかのこいよでかてはとものへくとてやしかはぐあり殿上人ともいとかりこ信上人

○中納言のけせんの細物語の誹諧よりもう
○あさやうなる也 巴撫 さかしもなき人也
○うつりて 弄 芝の屏風よりすくれ帰し
○我しの 盃 芝の供元ヒ刊也
○ちうしんの巴撫 芝の亭の中門也
○のそうれ 或撫 白宮の供元ヒ也

○君ハ入て 弄 芝の三条宮へうつりて此ぶ也
巴撫 夕霧のさしさけをとらせ
○うれな 万水 白宮と夕霧ハあちらこちの間也
白宮の座敷のやう可然
○もそ我 細 芝し世子とりちすハ白
宮よりそそまつあり

やわんさと くいえんぐ
うぐへてざりもろやけ物ら反
のけぜんのけよる間ぶばしわざ
やあわやくらきまぎれよを
まづとうえんうつりて御ぎさ
てとどうのくるぐおいうあの
ものけもうちうちうち也ぐ
さわぐさるあさけひうどみ
なりやこちうちんのりまそつぶ
やさうをるつまを行ておしと
うんやぐうる兵のうまそねぐさ
さようのそうづまつうんぐ

こちらげようひみれてうり
うあんうとうやうさまう
うきこちらうてうあ行てけた
なぐあるうとざうかしくまぐ
さ海しうあやのかおそぐあれ
あるうひるまでこうまうれ次わ
くかまそぐすうまさうるさうぐき
かうとをあやすうりてかし行うう
つうるかとこやのけわりさ海と
あやすくりのかおそまうり行
ぐふうまうてもうとおわ入
世ごうてうしうけうやとき

○うちつぼね　弄　白宮とてそくの内裏と
よもまつぜんとも　ありてしとと

○宰中納言よ　細　白宮と我しのひ　さを
云也

○ゆうりさ　弄　芸の早下也

○うちの御きしさ　細　廿二宮のゆう夕

○いくえそこ君よ　也扶　宇治の大君よ　ゆうハ
ゆ

なりてうちいでたまふ　なまいて也
ざうしと　ものつよそれ　ものく
うあはもとんとうちぐ　ぢ
もとあハ　宰中納　ものとうりく
よりひ　ものとうりく
のうちおしく　ものあり
ハいとあまりまづどうるさ
ものをかどうちおうり　世てう
うちの御　ものあるとまとふか
ぢ　ものこのもの　ものぐ
ハいぐぜんおりぐ　ものこと
ものあるもいぐぜんいふう

○あぜちの君　弄　芸の兵人
細　廿三宮よりうつ母人也

○うちつぼね　哥　あぜち君也　河　會坂関川也寛
平菊合元良親王　ものとうと人ハ　ものとうも関川の絶
ろ心ハ　ものとうと　細　人ものとうろ　ものとうと夜
ゆくいつさ　ものとうゆ　ものとうと　ものとうく　ものう

こぞ　ものよいとうく　ものとうん
よう　ものとうん　ものとうと
ろハ　ものすぐ　ものとうる
うう　ものうう　ものこ
ぐう　ものれハ　ものぢ
ものて　ものうハ　ものり
ものう　ものう　ものの
ものあ　ものん　ものこ
ものさ　ものあ　ものう
ものあ　ものう　ものあ
ものあ　ものあ　ものあ
うちつぼね　ものあ　ものあ
をみ　ものあ　ものあ

我が心とする心ゆへ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○ちりさま　或拙　以下六君のもとにて

○あらとろ　或拙　不足のこと

○そうつさ　或拙　多霧のつきぬるに相應

○きりのあやうそちこと

○ちりのあやうそハ何人のおやたしハやとあれ

○ふいのかくさ　細　中君也

○物の名ハ　弄　六君のもの

○うとくしを　弄　一ものあるもかくしたき

よハあるを

あるの西あるうさ海ひらん人やし

ぶよいとぐはこうるざーいうう

くう。おかさきようぶかどるる人の

やうぶらとさよぎそてごこのさろ

ばーらつさおどおのうてふ

わおりでこてんこれくいわひ

あまりるるまでまりひてぬく

しくきこうかのまこいて

えづーぎふらうくぎくはづく

あおこもたうひてごうちうき

んといえんよあるあうるつかし

ぶよいとるふりでわまりぶり

くるいはひあうさかとあるれた

うるあるまわるあうるつかくわぶ

やうふううりのどあとんこれ

うざうかくあそうづさぶいよ

くるいわるぶどあおやあていんも

あどうしぶつべくくくーこやて

うふあいぶやうつさうくうさ

ぶ。おそいの所ここはまぶかい

しいでうきるかのぶいて

もたうくひうまでみあまり

つるおくいあるぶ。どづくいてんん

ぶどるあかくうぶくしまるふき

○こゝろ〻 花 〻〻ハ殺也 こゝの人〻〻〻

○むもとろむく　或按　白宮とろむきて中絶ろ
やくこハるくてくく

○ろくもと　或按　白宮とうろくろくてハくくく

○くろくもれと　孟　芙ハ中君とうくろくつハと

○ひくひのくハ　弄　文の羽也　宇治まて八宮の才
三年の佛ろくと芙ハけいろくくとうおこるひ
しくる也

○くくろ心の　或按　八宮ハ芙ハの念比ハ名残と
花鳥大君とるもれ名ハ名ハとく

○くくろくくハ　細　ほいてもわハ立とうハ
つくくくくく

きれハるといでしのびてくくう
るんひぞふきひくきぬよいわるば
うも　きでくくろともぐくきめ
ばやくもぞふとてかしおどせハ
くそぐくてもわるおどくくろ
ひくろはやひわるくてどづーを
ものでは中納ろろくくもくきく
一日の御くハおぐろのつくハくし
おくくくきくはくくくろ御
くくろのるどりおくくもくハいふ
いるくしくと芙ハの御くくく
るもどくろるおくのるんふう

めづくる芙づくりくきくくく御
くくろのくふどくよ月くくくるど
きくくぐくくくくさ御ハ分もいくく
芙くきおくくくのきる月ふきハの
きぐもいくくくくくせきを御ハ
りきるどくくくびる御くくきの
芙どくくくくくくくひどおく
ひくくくるおくくくきハの色
くくくきくくくくくぐふく
くくきくは芙ハてくぐくく
もくどを御くくを芙ハくくく人
の御くくるぐくくくくくよ

○宮の御さ日ム　或按　芙ハの心也

○例ハこれくう孟　ま人くハこるのさくうくるる文人
御くまくきるるム文をおくるハくくくのくく芙
の御ハ也

○宮のいまあらしく　細　芳の心也白宮ハ六君ニ比
つさ結ふるるくし

○物ゝやう　孟　艶書らしくもすさまるるう
しそ也

○うを結ふるん　弄　芳の返るの羽
○ひゝとしたち　花　故ハ官ハ忌目ニ経仏のるると
しゝたちあてさゝるるとひゝとしたちて
云也ふれ中君のるると取分ちあるるとをゝ
人の名残とのゝのあへハ今の人ハさるる心さ
るるゝ云心也是ハ芳の文の返るる羽也
○さとあるつる　弄　今業宇治へまるるあんと
のあるるれハ不可然とおもるる
○名残と　巴扶中君への心さゝしゝるれとひゝの
心さゝしゝのあるハ無曲とゝ

○ゝくよゝる　或扶　艶書らしくるさ文也

○又の月ハ　孟　芳中君のるゝ人也

○丁子ゝるの扇　弄　くゝりの羽るゝし
万水　丁子染ハ香色也

うゝわどさあるもしるべし
ゝやの今ゝくゝのゝゝらあへ
るかゝて　おゝをゝうるる
をゝおゝうゝるゝくゝるゝ
るゝをゝいゝあゝれゝおゝ
るあるまりあゝいゝゝをゝる
もゝうゝどゝいゝゝくゝるゝ
ゝるゝかゝけゝあるるゝ一日ひゝ
ゝるゝるゝあゝゝゝゝ
しのび侍ゝゝるゝ
侍ゝるゝひゝゝゝ
あゝゝゝゝゝ

よゝるやゝゝゝゝゝゝゝ
あへゝるゝゝゝゝゝゝ
るんあるゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○あやしうし　細　宇治そのゝ也

○ゝそめまゝと　細　草子地也

○うゝかゝさ　細　白宮ゝゝゝゝれハゝゝ

○ゝゝゝハゝゝゝ　盃　ゝゝゝゝハゝて芝を
うゝへゝゝと也

○ゝゝハ乃ゝゝゝ　弄　ひゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ゝゝゝゝゝゝ　細　芝の羽也ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ文の羽ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

○ゝゝゝゝゝゝ　或抜　ゝゝ文の後追付ゝゝゝゝゝゝゝゝ

○宮ゝゝゝゝゝ　細　ゝゝゝハ白宮ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

。なとて　細　中君の心也

。ひとひうゑく　細　中君の詞
花　是八芳の宮治代山里とゝゝゝゝゝゝゝゝ芳
しのつゝ所つゝしるくの所ゝるゝゝゝ也
巴按　八宮忌月の法るゝる也
。むとゝゝ　巴按　法事に祝着ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

○世やハうさ　何　世やハうさんやハつきあるものゝ
をゝをゝむ虫のなれゝゝゝゝゝ
細　我ゝゝゝゝゝ

○山里よ　細　中君芳（ヵ）　脱也

○ゝゝれゝゝも　細　芳の羽宮のゆゝ脱ゝゝハゝ

○ゝゝゝゝゝゝゝゝひめ　巴按　廿のゝゝひゝゝ心ゝゝゝく
白宮のゆゝゝゝゝゝ

○ゝゝゝゝゝゝゝゝ　巴按　白宮の出ゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ゝゝゝゝて　或按　芳の歩行ゝゝ送迎ゝゝゝ

○宮もゝゝゝ　盃　白宮も我心ハゝゝゝゝゝゝゝ

○ものゝもゝゝゝ　河　ゝゝゝゝと物ゝゝゝゝゝゝ世中と
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

○さてもいつくう細引とりんの心そうめアイ

○たくゝ入さて細中君也九月ゝゝ

○うゝよう世の盃句宮ゝゝをりさんるゝいとゝ

しゝさゝゝ

あやまりくのこゝ侍をみうゝく

やりひ給へらるまんかでふ事

ゆゝていう給あるゝこゝあるが

いとゝちおしまれぶさてもいつ

ぞうやがしうづきまういて

しまくなし　右の君もまう

ずゝまゝ世作んゝときこし

給つぶまづいうゝてこの月も

すきあるまぶはいつゝちのかぢも

とゝていりひとづまこづいて

しのびてこゝそうゝあるあるある世

のゆうゝあどとくしくこの給へ

○むりゝひ　也扶　あゝ君よりこの似ゝる也

○あゝゝや　花　の給へよあゝゝやの心也君ひて

こゝそうゝひとし宇治へのゝとの給へとうゝ給へ

てあゝのゝこゝとうゝるゝてとゝくゝて給へうゝ

うやゝ給へん近くゝうゝてゝる給へうゝこゝあゝんとゝ

うゝをゝて給へゝとゝのゝう〳〵入給へ也

。らくへとさ　或抄　中君の心

。そひの外　細　中君の羽

。是ハとりの　孟　芝の羽也

。いうへとも　或抄　宇治をそのる也

。ときうへ　細　大君也

。ゆうすへき　或抄　とへとる袖をと

。中くむきる　細　中君の心

孟　せんとるくとりを心とく

させんとぞうとくおくもゆとて
ぢさみもあるあるとうとうの
出をきやとうとあるへいへ
すぐをさうとをどおもうす
ようておりひやりあるをせあて
おりひしづめておりしのあるり
ろはとうとのかぢうおくへの芝ふ
うんとうよあきあるとあらうて
をきあづさたてさかるずう
いとうるれいとおしをれど
ハとあるどりのとうハおくり
のらいめんハいへとものあど
あのうすきあへんの出ゆうもも
あるうあるといとうるおくあど
ろうとをきうてあるとすきど
しくあきあるきうとうあるじ
しとうやすくおりあるとうく
いとのどやふあてあるおるすど
月どうのうやとあるひとうろ
うとうのうとうのうるうきどあう
のきあるをはんどくしひうどを
おるてゆうすづうきふあわう
ねよせんうるおくいうどもも
うるうはりくとどふのうきん

○こはるを　孟　芝の汀也

○ひとをと　或扨　中君の躰と芝の心也

○あしさゝを　河　あしさゝをハ人のとゝみもて
うとゝあしさゝをれハうるれきを

人ゝうもだづくこゝろづき
かゝてなきあるひめるをとゝ
なるあるかつくしいらひ
ひとゝどゝとゝげよゝろ
ゞゝきゝゝゝいゝくゞ
ゝきのゝきひあゞのゞて
ゝうもこゝるくねびまゝれ
ひゝゝゝるゞをゝゝるゝゝ
ゝゝゝんゞかゝてゞやすゝゞ
あゞゝゝゝゝゝゝきゝゝ
ゞゝゝあゝゝきゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○いとをしさや　或扨　中君のゝゝゝと草子
の他也

○いゝゝとゝゝ　河　後悔也

○ひゝゝゝ　氷　芝ハゝゝゝ時ゝ用意ある
人ゝれハ今ハゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○くやうのとき 細草子の也也

○ひるさ物〻 細 芝の實なる反也
或抄 以下芝の心也

○こゝのちゝ 花懐姫の母ちゝの事也

えぶつざうくうゝやうのとぶつハ
こゝろふもえあんまのびつぢを
ざりもうひるさ物〻人のの
あらあらとおりつぶ〻ぶつぶ
くゝてらぐぶのまぐしひと
ぶりひつまでおろつさちゝぶ
ようろとんとぶじうんのやん
とまづうさも世のれちのの
いてやゝさぐゝおやまゝぶ
きくゝちぶこちハとうあう
くういとゝづゝとおぶゝう
ぶるこゝのまるゝよおぶゝこゝも

○とこくまゝの巴抄 芝のひるさ物〻心なるさ也

○さゝゝ 巴抄 〻〻 觀念なるさこひさ
ハこゝろなるさと

ぶるゝ〻ぶゝてやこうゝうあ物
のおこぶまの心やとゝくゝぶるさを
なるんとハなをゝくゝあるぶ
みなこゝちのこゝぶこゝの私を
ようなておあぶゝちあるこゝろ
をぶゝひてのゝちぶこゝをゝも
わぶぶんかのゝぶゝあくゝのび
わゝんかぶもこゝろぶゝてよ
をんあのゝぶぐおぶゝんぶゝん
こゝあぶどぶゝくおりふ世れ
どいまのまもこひゝさぶワ
あゝくくさゝあぶゝいえあゝで

○むすめハ 孟 中君の躰也

○ちるれ 巴按 ちるなく

○うちよいく 孟 宇治へ四とせとしてハあき
と白官の同心わるまゝさゝ

く覚し給もことくあや
かりそうろうやとしてうう泣
ほうやこそおてからこげかう
つるきひおどろくあれう
も覚しどあわそひらん
ちしてさふしくの覚し
ありうらうらあひてうまま
ほしぎふおげいらうをさりや
とうしきてまうおどおり
どまさふやゆうおひてんや
そうとそのびてうさらびな
うんいうまあうてうあ

○例のうくハ 孟 芸うり中君への文也

○ひさつ之寄 芸也 細 背しるされたるハわり
巴按 一説 背おかゆるハわ君うの中し出わり也

○とくうちん 河 ちをれハうおんものを
ちとくとうちんつさるう
弄 引寄まてもる

○うをおくうん 細 中君返る也

○心のびてうさ 孟水 心のうくさうんうの文也

かておりうこうのゆうびさ
うこうもわうびてあうう
おうりおうびいうさわうんな所
うをありまこのううびをやうあ
うそうあて

いうびようつる道のうるこげ
ひうおるる秋のうるあ
このうこうさいうこうこう
うこのうるんきうこうんう
かくうりいうこうあるんもの
まうおうるんうこびうをとい
ううまおいうみうあうい

○あまりこゝろをくる　或説　芝の心

○ひこ〳〵て　或説　芝のさきをとりて出

ゆるくて　えもしらぬ　ものゝ　こゝろを　おもふ　ことの　ゆかしく　おもはるゝ　ものゝ　ことの　ゆかしく　おもはるゝ　ものゝ　こゝろを　おもふ

○いとく也扨　あゝ君のゝたまひし今中君はゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
○これはゝ　或扨　種々の思案出るゝ

○あるゝゝの心　細　中君白宮とはゝゝ
或扨　以下中君の心

きゝ　ゝ　ゝ　

○のろひて　細　芝とうちて

○くるしく　孟　懐姓の人と白宮の足ばかり
るもなさるれハ也
○うちとき人　細　六君のはら方也

○くれて　弄　男ハうれもやうる羽をうつ
くとりのうりとりたる也　或抜　以下中君羽
○あみうちうる人　弄　芝とのう

人のゆきもおりひそ
てごろわるきなりうんべ
とハひとうつまでかるくく
さゆてハおもとをもわるもの
こくおりつふごとの所りさき
のうのあハいそやしおりひあぐ
もずうつんうちうくるそも
わきまくたゆあてうきち
しやごうしの人あうくて
うちうくうぐうり活しうち
ぐんいぞあうぐうりまれぐ花
うちうくぶうちうわぐうり

○あきとをと　孟　芝とハうひとくもんと中君の忌
○咲たひくさき　弄　うちくり見ハ芝より皇
とうそうの人きうあうく
○さてもあきまくく　孟　中君の芝れうと見
○ひうの人ニ　石水　大君のうと芝中君ハ
ハうくく

○くしくしくしくし細　白宮のくくくくけす
巴扱　白宮のくくくくき間は芸のかくくいぬへハ
白宮のくくくくとくくくくは心とくくくくぬ

○この人乃　或扱　芸也

○その人くちれ　巴扱　白宮好色の道者なれハう
けくくくと推くくぬ

○この外は　万水　中君の心也えのくくひぬハぬ

○されてよ　或扱　白宮の心はてしのくくはひ
ぬくくくく

○ひくくの出う　孟　白宮のくくくくと白ひハきくくく

○くくくくそハ　巴扱　残るあくくくと白宮の
きくくくくくぬ

かどいなくくくくく

心うつて　細　中君の心

○ひさこい　弄　さきのゆふやうに東宮

○これをさきよ　花　六帖　人なれは我をさ

きまもられつるをもて何りしのそん

今宴中君の我は六君よりさきにむりてれはう

よりさきにうるはしくこうちをむさ給へきなり

巴殿　此引奇の心は人々人なれは我をうを

るの人々しさきまうくんとうむ奇也さやう

に思ふさくくよりうくん白宮の女れ夜れよ

まうに心をうーあるへうと云心へ　弄同之

○又人に奇　白宮也　盃　又人とは其人のうり

香をしらめてん

○いくはなて　或殿　あるう物のあるをもいうこと

○又るれはう奇　中君也　弄　ハうり香をうり

細　此奇も又大やうにひるーあるり

○うるはそう　細　ふうりの不に其も心とう

へきと　白宮の心

○色ーさ　或殿　此色の中人なれは衰とうえう

あるん

のあるひつぐらにうとうて

男ぐをきこうるなさ男きこる

うさ海とはなるものをとはして

きもふおぐ　やうにうちをしく

きてとふそわきこみ所とうろ

をきてまへぐりのなぐやはある

岩ひのほふふうりうはうろ

うるとすぐくまもあぐくもあど

いとおーもふきこと給ぐ　ものも

くもいうへあるうさへぐとねく

うゆ

人ふなれはあるゆのうるもと

うぐ月はあるくうこはうは

せはあるもうくのうもひつぐうる

よいへぐさうるもあさをいぐを

ゆて

又あるはあるゆの衣となるし

をうぐうりのそやうひうるん

うそ　ゆけきはへかりうさはぐう

なくあるはあるをあるあもく

きはぐーというこうやまうて

ものもなるうとうがーあるそ

いるうーうさけうこうなるやまと

よいうぐさあやまうあうるもひさ

○ふかうく　盃　中君の心とゝのへて白宮はなく
さゝげ

○こまやか　万水　中君のはなさうはなさいく

○さいかう　細　六君はなの方の月ゝ

○うゝくゝゝ　或抜　人〳〵の衣裳のたゝなをい
ゝ

○君ハ　細　中君也るゝ〳〵ゝゝゝ

○うろひうろうろ巴撫　芸のうろう香まて一へ
中君のうりひうろいうろ〳〵
或撫　うろうろ香のあさ時さへうろうろうろ

○ふれをうろ〳〵　細　兄弟をとるあるへ必近
つきうろうまへうろうまへうろ中君のうろ

うろひうろうろあるのいうろ
かうろうろにおいるやうづうろ
うろ京のどうをへうろ岩ほく
まうろうろあるうろまうろうろ
をうろうろうろうろうろへのを
ちうろいうろうろひうろうろうろ
うをうろうろうろうろうろうろ
月あるれんいうろうろうろうろ
ちんうろうろうろうろうろうろ
うろうろうろうろうろうろうろ
うろうろうろうろうろうろうろ
いうろうろうろうろうろうろ

○常ふ心と　或撫　芸の常ふ心ふるまて艶書
うろうろうろうろうろうろうろ

○うろーうろひう　花　以厨子か唐櫃也

○うろをうろうろ　或撫　蕚直の心也

○いうろうろまへ盃　常うろうろうろひうろうろと今日
いと草子地也
○のへ人　細　芸也

○うろの外ふへ万水　中君の芸をいうろうろ

かうろうろうろうろうろうろうろ
でうろうろうろうろうろうろ
をうろうろうろうろうろうろ
しうろうろうろうろうろうろ
なうろうろうろうろうろうろ
ともなをうろうろうろうろうろ
しうろうろうろうろうろうろ
のうろうろうろうろうろうろ
いうろうろうろうろうろうろ
うろうろうろうろうろうろうろ
うろうろうろうろうろうろうろ
りうろうろうろうろうろうろ

○六条院より　細　六君のゆゑなり

○老人ども　巴撥　中君の女房なり

○心やましく　或撥　以下芝の心

○うしろやすしと　巴撥　中君と白宮との中行末久しくと思ひしものを也

○さはいへど　細　くれてこそは芝の心は思へど中君をもてなしたてまつらんとなり

○人々のきこえ　細　中君のゆゑなりなほ人々と思ひやり給也

○母宮のゆゑ　孟　廿三宮へ芝のまゐりてうらみきこえしもあはれなる人よつうしたてまつりたる也中君へまゐりたまへきこえあり也

○きさいのこと月　弄　芝の道心まことにて八講などをなし給ひあるべきさやうに法事を

廿九月ゝ　ゝ　ゝ　

○人くまとうちし　孟　大輔君うまさうてよく
ちうてみえもう也

○ものくちく　世説　女童うまし

なれどまことうてつこもてこんぢ
ゆうんせきをねどきまぐもや
かりかけうちうちてひいつめて
うそかれなれいぎもきてく
えうるぐ小こえぐさもわねば
いぐこもありひうつぐんぐ
ようちちうぐれいをく
きめひおぐすうきんぐ乃
けまうちうはうまつるかぐ
ちうひうていつうひうあさ
ちもづうぐものいうかんぐ
ぐうつうすぐうあかひさ

まうちえん　孟　攜手ハ手ヲ引ク心也

○これハ何ものも　或説　中君うしうあとくさ
人ぢうり外ようう

○世中のうちのハと　孟　白宮のれ心ひかりしさ
せうふくのうとうとく也

○えんようう人ノ弄　白宮のうう人ぢのうと袱の
説也恩猶白宮ヒ

わうぢかりゆてうちうえん
ねぐ作くやとうりうぐれう
かわぐをもうちうづき
きこのうんあんあうちう
あうあうんぐかぐ
うづをいぐとかぐをて
うれぐこうあうちうくのく
まぐハいぐかぐうんかぐりも
かくんかのうづもてかう
とを説まハ世中のうちわず
きびうきいうあうものも
ハ酒うあうちうかえんう

○なかとの細　白宮ハ中君と一段と勝
やまとよりてこそ是かしもとそ又ハ
○いてやまく花　ところ〻ぬれ乳母ハ白
宮の所後見のさとをろるやうよろ〻ア也
○中しうろ　巴扱　中く山陰ろも也

○世よひさ　細　六君の所方也
○ろハなやのうち　巴扱　六君のろるやうさとか
ひやまく中君の世房所の心と也
○中納言の君　孟　芸のろひやまわろ
○うとうん　巴扱　うとさうとうろ物とろハ
くく〻さのと
○ろまろハろ〻〻　巴扱　ろさとやさて八中く
ろて何とろくやろく也

うぐろさむくえたのあとをもて
あろびてふるすぐさ物と者
しろかぐろハおがとんの落
なれいどのづ〻ろ〻ろまを
つまあやろるこまであつひ
ろ也ろとおぐ〻めづる
かろこるあまいどやろどそ
ろしぎふきこゆはあろぐ
もろもろどろしぐのろ
わぎやろのろ物ろ中ぐ
おぐ〻ろをもそんあぐみは
ろづ〻はくなるまのふも

ろろのどんれどろかとと
なきふもわろのふまてこの
どろハ世ふひぐきろはまろ海
のとろやさよろろあのうち
れんのんおろんとも人ぎあさ
とろ者ぐ〻んぐろとをひ
てるぐろこをはのこのこみ
いろ〻そ〻いろまれんび
うとうんあろうのふんぐるく
ろぐ〻しろぐこころとろひ
のさ海もおろのづとハなれ
どおのハぐ〻しく〻ろて

○今ゝ又　細　美八ゝりあへねりのゝもゝれハ今
ハ又ゝゝさゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○あやのきゝ　河　綾糾　糸のゝ也
花　きゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ひとくさる　或拙　中君の心

○ひとくよろぼへ　細　業ハひとくるまもいろ

○あさハかゝる　或拙　業の念比とハ尺ほひ

ふれも心やとゝふるあひしくこんもいろ

ゝ

○尺ゝみあてゝしさ　花　新糸のくもも也

花鳥の本尺るあてゝし尺ゝるれゝゝとゝハ

弄　始てゆゝゝゝゝゝゝハ中君の心をさ弱ゝ

尺るれゝゝハ古さくゝゝ心よゝゝゝ也

○こひ君と　万水　大君のゝゝ也

○ゝゝゝまゝゝハ　盂　業ゝ大君のゝゝゝハ心を

とゝきゝゝゝ

つれなしつれなし　巴扇　白宮のうちうの心うの業乃好色もの
○なるこの君　細　業也

○いとうるはしさ　或扇　中君のくしてとひ出て行
てゝ也

○ひるくつくつ　或扇　業の心

○うるはしもの　細　業の羽醫師僧るもの類よ

○一夜の　巴扇　先日の夜代りとりくうの世房方也

○うるの夜代　花　特もろくを夜居の侍とゝ也

○人のくゝよ　細　中君の心殊勝也

○をちうえんなん　孟　褐要ゝいんるるさもいち
ちゝさやうるれハゝ

アクセントのうちふかきづ海ゝ
くゝくゝくゝ世ゝうゝうゝ
うのうのゝゝうゝのの行て
いとゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぎふいとんぐるくゝゝゝゝ
りゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○むかしの人の歌 大君のゆきの人は初發のすと
ゆひ出給ふ君の心也

○こよろぎ切なり 或抄 先夜よりハ物遠き也

○うりすゝ 万水 中君の心也

○女房といひし人 或抄 中君の女房也

○むねハとき人 或抄 君の初也ゆるすとゝしこゝ
しるむねハくるしき物とゝ以下心也

○みるとり 巴抄 君のみるとり給也

○もゝとゝ君さやと 細 中君の心也君とゝ以家あれ
ゝと不用之 河 捨遺 水鳥は下やとるゝゆゆ
ゝハあるゝの水もこゝろゝさりもり

○いるゝれハ 細 君の羽

○人ゝとゝい 細 懷姓しるゝ人のゆりむさとと
るゝ人ハとゝ

○いしゝるゝ 弄 中君の懷姓なるとゝ

○むねハいろと 細 中君は羽芸の人ハ大君也

しるているゝ人のゆゆとゝ
のゝゝ人はとゝひのゝ人のゆ
ゝゝ人はとゝひのゝ人のゆ
ゝゝ人はとゝひのゝ人のゆ
いでゝゝゆゝくゝゆゝくゝ
ゝゝゝとゝゝとゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

○きよしれと　何うも世の心よりのくるるゝ誰
と手前の仕るゝるくよ　也桜　芝の心

○はやりよせ　細　女將也

○その品々　或桜　中君一人八心得違やうよ女將八
ろれと見るゝやうよひるゝ所也

もかくこそ八仕をしたの
人もさこそなの所ひかな
うまぐき人のするどこゝ人
もいひ侍らうこの仕ぐるか
れも女の杜ろ世をと
ゆりつるハこゝろづくく
あるとるれどのゝ世てう
人のきうんもつまどこゝ
いこさどのことをそえの
うじまじてうとひやうえ
き面おどをうの御ろひれま
ろうえをあぐ人のもんこ

○きよりうこさ　細　女將の心也

○こ君乃　或桜　大君のゝを芝ゝ世れ所八也
ゆうるにどとつまても表
の品事をつる世どゆりひ所
つるいをるうしをこう世乃
中をゆりひるれてやうあぐき
こうづひをのこるひ仕り
しるぐまゆ侍りもんこき
ものこをうるぐまゆりの合あ
きこ侍ひ所おのの中の
ひぐをこうふこすぐひ

○いこををうし　細　芝の河

○こうるをを　細　大君よ心をを初しる

○のかいの世桜　ゆひ君ひよ芝の出家るの
る障こうこ

○うてもうこうも　也擬　あな君の心そうろうと
あるとうろうくゝ好色のうさうろう

○心のひくうさ　也擬　心のひくうさゆゑ心のあうろう
まゝせうろうしと

○ゝうハうろうの百水　ゝ今代やうろうと

やゝうまん、おぐさあどうはうろう
おもうこうもゆさかづゝひて、
人のあうろう海とうんうまして、
まぎうろうこうもやあんおどうひ
うろやりくゝ仕まどうろうあう
ぎ海うるびくゝぐも仕うどう
うゝうろうづふやりひうまん絶て
ハうろうのひくうろうのつようろうば
やうまうしばすまうどうまうやう
おわうろうんとうづゝまうまて、
あうまゝうまうろうのうまうても
あうべくふうろうもうまうかうべ

○人ハ人は　百水　我とハ好色の心うさうのゝ世上の
人ともうれハもうろうまゝうさゝ

○うゝうろううさ花　うさうろうハうゝうろう百つひ也
ゝうやうとくおづうれうどうろうみを

○うゝうわうて　也擬　中君の詞也　等閑ハ人の人
ゝうもうまうのうハうゝうしと

○年ゝうもうろうううさ　或擬　八宮坊薬草の念比
とハうゝうううゝと

うどうのうどううて、とうれくゝうふ
ゝうともうさうゝうもうさうひうふ
ううとうどうゝうて、どううのうれう
うんをうゝうふうれうんうづうさ、
世のうあうあうんのうどうふうん
ようどううまうどくゝ仕うをうひう
ゝうやうとくおづうれうどうろうみを
うううまうううさうゝうううて
うりひうさうゝうばうどうあうゝとん
もうんうりひうづうまうでいやうて
仕うどうやうどうゝうどうううるうさよ
つうまうて、うゝううゝうどうの仕うば

○[illegible]人あり　孟　芦と中君のこと[illegible]人[illegible]

○今ハこれより　巴撥　中君より芦へ[illegible]

○さやうの　細　芦の羽　中君のこと[illegible]芦と

[illegible]と巳前のしるとしるさるの

[illegible]

○岫の山里　或撥　宇治のこと也

○うゝして　細　山里へのの用よりそのの[illegible]

○[illegible]　細　[illegible]

○[illegible]人あれハ　万水　此撥のこと也

○山のさとゝく花　二条院の庭のつき山也と

くさハのゝくさ也

○[illegible]　万水　中君の心也

○[illegible]　河　六帖　[illegible]

[illegible]世[illegible]

万水　上ハ大君のこと[illegible]ひて下ハ中君のこと[illegible]

○[illegible]　或撥　芦の羽也

○[illegible]の里　河　[illegible]音[illegible]の滝

花　紀伊国の名所也音無川ともあり

細　宇治の山里[illegible]

宇治也

○[illegible]　細　大君のこと也

河　白氏文集曰　香炉峯北有寺号遺愛寺伴

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寺者高宗皇帝有最愛皇子至七歳忽夢不堪哀傷建立堂舎王子形安置其中草堂記畫圖事漢武帝初喪李夫人李夫人幷泉殿裏令写真丹青畫出竟何益不言不笑愁殺殿刻事武帝以董仲君李夫人貞作以温石人

。哀ふる　盃　中君の句

。ふるし川ちくさ　河こひせてとふるし川よせ
ふるさと神ハうもしもるるこるる
弄こひせての名後し心さよるゐるれハ
ひよ似合ゐ心也　細　人形といふるさていふひ
せるるいふハ佛の道よりさとる也
。こるりとむる　細　昭君うしくわくるるてハ
ゝ　河海枕詩註とひもう河委

。ゝよるの　細　不言不笑の形ハひもるゝし
ゝゝいふも中君よ心あるゝ　異抄　葉の句

。ゝるゆせる　河　ひるのるるるるとる
可勘付　花　水原云ひるのるるハ母のるるう
ゐもう世とるるひて形とるるるれハあし
るもうるるとるるれハるるるひを

ゆるゝ或説云ひるのるるハるるる
ゐ花とゆせるるゝ
或抄　変化のものとハ神妻と現せんものもるゝ

。今もるる　細　中君也

。人るるの　花　手習君のるるとひ出んるる人
るるのつ外てるるいふ昔ハ人るるひるれハるの
形代ゆいひるるて葉の常ゆむるるるるるゆ
えるるるとひのれんるるるゆ也　細　中君の句

。るるるるゆ　万水　葉の句也

。いるるるる　万水　中君の心也　手習のるるとる
るるて我るるるるるるるるとのれんるる

ゆるるゆるるるゆ
るるるるるるるる

○叶ちうさく人　或説　必將君也

○弁ろハ　孟　中君のうさ舟ゆるとうう　紫苑
河也

○ほとゝぎす　或説　ひうちうのあわ

○うひいて　巴説　中君のうえうひ第うう
うえ　中君のれ母ハ浅舟の母ゆうよハ　常
陸の受領ようわてうう　隻上路ほうう

○ひう人の　万水　手習君大君ように似ほうう

○くうえうて　弁　中君とあひ君のうえと芝の
浪くさうぬ人くうもうものとうう

しまは此浅舟ハ似ほうう

○いとうも　孟　故姫君と一腹ゆえもうさ人の
ゆえひうう心也

○ゆあうう　花　芝の夢うう　ほ仏也

○うう人うさ少人　細　芝の紅

○いさや　細　中君の紅

○うの少人も　孟　八宮のあ　みも姫ほうう

○うう人ありうさ　巴説　大君中君ゆ人のうさ人
人ゆうと八宮のあ　ありてうう人法ほうう
ありうあ　ありうると今ハ中君ひうう人あう
ありてうう　ゆうるゆ　ほうといひてひつひていう

てゆうふわうんとゆ　ゆ　ゆ　このう
ちうさ人のおとうんうのわうあく
てううぎゆくうてあ　ほう　ゆ
ぎうう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うう人のこのうゆうぎうひうさ　ゆ
うう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

そさのをのみこと

○えあひるさ　孟　我身をわるるえあひるさ
とろくてゝ

○のなをしさ　細　芝の推しなを也

○ゝやの宮ひて　弄　八宮のゝ

○ゝ草　河　むらひとくゝゝのゝふゝ
せハ何ゝしのゝれ草とつゝし
花　故宮の落塵閾の世とゝ也

○ゝゝゝゝハ　細　芝の約

きすゝんとすんゝゝのゝ
ゝゝゝげゝゝゝゝゝゝゝ
をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

○山里のあるじ　故宮治部卿殿

○いとやんごとなき　八宮の御子なりしかば
いとやんごとなき　中君の約

○ちりぬるをれと　河口軽　ちりぬる物の心也

○いと遠き所　花　常陸国と云也

○世をうくの事　うき舟の世八中君の心也

○ものしてし　或抄　中君のうく浮舟のさまなり

○ものしてし　或抄　中君のうく浮舟のさまなり

○ものしてし　或抄　中君のうく浮舟のさまなり

○これといふ　或抄　万水　手習君と世のうきものとの
ちがひ也

○佛はるる人　花　芳の山里は本そうりの所
つきなき約也

○うきをるて　細　芳の心也　中君は歌ばかりを
のわんさあとは推し所也

○あるまじき　巴抄　實ないあるまじきと中君の
思いるまじきをうきものとあるていりてくるて
なるるぬはなるの所なりと心とさめき也さもろ
思ひのなるき芳の心と中君のなるの所なりと

○内よハ人ウ　或秘　中君の心也

○うちとゆめて　万水　中君　芝ゑゆんさけて簾中ゑ入給也

○しとうしハ　或秘　芝ゑの心也

○しのんとてハ　万水　芝のうへ給て此心也

○きんしう　花　練ハ調練しうの心也

弄　芝ハきんしうをなかとる無了箇心也

○うちうと　盃　浮舟のうへ芝の心

○ふくのはな　花　母君のうとくすると云也

○人のけいいまし　世撥　あの君は似たいと心もとまれる也

○うとくすると　或撥　浮舟への心もとまると云中君への心をまそとく

○いとこむし　細　大君のうと也

○いとこ〳〵　或撥　九月の末宇治の鮒也

○ささしくち　弄　障子うとくし

○いとうときれと　世撥　物うはいうとくれとを弄うとくとあるとくれと云也弄う句也

○いとうとくの　細　芋の句

○人のうとくて　弄　あの君の中君にうとく物ひひ作うとく　弄う句

さどうのきこはかくねばかりひとん
よくくらあくばかりも人のこい
ものあくばかりうるさくこそあり
ものあくばかりうるさくこそあり
ものあくばかりうるさくこそあり

○秋の色ハ　河　秋はゝいろ〳〵色の色なれハ
身うむいろ〳〵人のこゝろさ

○きよみの　或抄　中君の今六君のうへ物ゝ
をきるをハ大君のうきさ[illegible]
あくもとゝ

○あくゝ　或抄　うきさうなくゝ

○ゝあるゝも　細　萱の約也

○あちさゐ　巴抄　大君の中君のうへ物ゝ
きゝ

○ゝゝあやまち　細　秋の中立せしるゝハ
うきさゝ

○世ゝの　年　白宮〳〵中君ゝの
或抄　六君のうへも可有ゝ也ゝ中君ゝ

のゝこゝてあつあつ物ゝとゝ
しゝのゝゝゝゝしゝ思ゝ
よゝつゝ作ゝ年ゝ秋の風ゝ
あゝてゝ作ゝ作ゝて
きゝゝのゝゝゝ作ゝ
き世中のゝゝゝ
うけゝ海ゝゝ海ゝ
きゝ海ゝゝゝゝ
てゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

○ゝゝ　或抄　六君のうへも可有ゝ也ゝ中君ゝ

○ひてもく　細　殊勝の約也誰もくゝゝ
せゝ

○ゝゝゝゝゝ　或抄　未の歌ゝの
ゝゝゝゝゝ

○ゝの四忌日　細　大君の一四也才二年ゝ
或抄　芸廿四歳　早蕨の年ゝ九月也　不用之

○ゝゝゝ　或抄　芸の約也

きゝ海ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

○八の山寺の 或抄 あさりは寺はてさうなる

○うきいて 或抄 芝人のうきつをて也

○いとうとうとさ 並 あさりの初

○むりの人の 細 八宮也 芝の心也

或抄 芝の初あさりよ對しての詞也

○うの心さし 或抄 八宮と寺ゐるすてハ

ひろうんと

きんでんうちておらさきのさ

てるぶうたそんとるん芝のこを

芝あるこうこうでめでんとのおひ

てぶういうらうどもうづ

るどおるぶきてもうきいぐ

のうまひあぶせきそうあこを

いとうとうきてうきこうきこ

とおりてのんのやつうはとまる

よーあはうとおひまんとうと

けうでんるうけあきやうれん

とうのはうるぶうもんぶくの

ううおすこうあぶ芝はまん

○うきはうんうを 細 故宮も姫君ちのまいまと

ゆんうきて寺うきうるうんるハ芝ひううひ詞

はうあうこ

○きうあうさ 細 中君也

○うの及やの 弄 白宮のうるうんし

○心はまうせて 或抄 芝の心まうせよも成てと

○ううとうんてんと 弄 此うんてんと寺よつうて

又うこよ別よ寝殿とつうあうんこ

○とあううあ 細 あさりの返答也 可然うこ

をとまうはうんうをとあり

かてえきハとはてうあはうぶう

はうるやいまハうるうあのかの方

こうハしうとあぶをれがあうやの

はうとううあうひはぶくあうはう

うきぶうあうぶうきうかあうんとハ

ぶんかうるぶーこうふまうせて

きもえせでうあうのうあはあまう

うハぶうちくをせうあもあきバ

うをうんでんとううひてこうあ

あもはうとうんのうあうとうる

とのうまんぶうきあはううぶあいと

○むり別と河 或傳記曰 觀音勢至の月位は
昔人のまうそあそしまりまろは継母のしあるよこ
ろされまれハその親の尸と頸はりをて終佛道
は入給る也經文は有こと
細 この心ハまへは餘習とをて〻佛道は帰へ
給ふ〻〻
或抄 本の母は尾ゝや執着をるること〻〻也

○こゝろしき 弄不可然事也といり

○後の世はをめ 巴抄 善根と〻

○こゝろんのそ在 河 暦博士 推古天皇十二年
甲子正月戊午 始用暦日

○こゝ 孟 大工也

○佛のゐを〻 巴抄 寺のあ人さやこゝ〻

○とゝのゐひ 細 恙のさゝわゐ也

○世ゝひハゝり 細 恙の心也寢殿とこゝろ
或抄 あゝりの寺也

○の寺は 或抄 あゝりの寺也

もりこゝをこゝろうこゝはこゝろや
しゝもゝをうめこゝてうゞひを
つこゝておまこのこゝらびようひて
給ふ人も佛の御こゝろべんすて
ゐんのうゞひのゐこゝろををこゝて
はいよひゞをめこゝもも人給よ
ゐこのこんでんを御らんゞるよ
はをて御こゝろうゞこゝおゝ
まゝんひこゝよゝひゞこゝ事
おゝみのこゝの母のすめこゝるべ
こ事は給ゝゝひうゞこゝ
ゐべゝこゝをのこゝをひ

よて給ん日をうひ御ゝて和
のゆこゝをこんこゝこ三人を話
こゝて御こゝおゝこゝも佛の
ゆをこゝのまこゝよつこゝまこゝ也佛
んゝ尸ゝこゝの話ひこゝおて人
こゝのんゞもめてこのなのと
こもわゞこゝのいこんまこゝよをゞこ
こゝおゞおゝ也話こゝおゝこゝ言
おゝをゞゝこゝの恵ハこゝゝ話おこの
こゝびゞこゝこゝいみめこゝおゝて
こゝこゝめこゝこゝこんこゝまゝゞ佛も
こゝのこゝこゝおこゝこゝて也れゞ尸

○此ちんてんハ 細 弁ハ葉の転訛也

○京のゑんやハ 万水 中者ハまつ〳〵もゝ〳〵き物の〳〵ハ
葉のゝ領代人をかりよせてまつりせたる也
此訛なるき本有之

ぢのをこのひのぐのこのりいと
ちろのがかをまのるりをわられ
よいかりてゐをとんとゑ訛この
えん食ゑんてくつろぐ〳〵ゆきあり
つろいでんかぐのらうゆ酒し
訛へ京のゝやゑうをとるる
づきあるぐわぐさのゑんて
あるぐ〳〵んやうよりの訛へかぐ
まあやるゐてもとうしひ訛
ゐりかりていぐりはぐすぐ訛
人をかかとこいまれぐさるも
あるねぐ〳〵もちろゐかをて着

○こ權大納言 細 柏木也
或抄 以下弁尼ゝ羽也

○今ハとゐり 巴抄 柏木の今ゑの時葉をゑ
物ゐりかりめ〳〵ゑ

○ゑなり行ゐ 巴抄 葉を弁ゐゑ
○ゐのれ世ゐ 或抄 今葉をゐ〳〵ゑ
ゐ奉公ゐ世〳〵ゐる〳〵ゑ

○いとをかしう　河なまとをとの　ちとつよあひ
あんとしの　ちんるもをかし
○ひやうも　弄　中君ようも也

○こひめ君の　孟　大君也

くもりなくくも　思ふてれ　ゆる
をかしうきいのちのかぎりまで　海
ざ海のことを　ひんぎへまで　思
しるとゆるんいとをづくをかし
うくゆるこやうもをきぐ
まいりてんをてまつきおびつ
なくをとこりをてめるかをよ
なく思へぶてもをるうかでの
海をまるおりくゆるまでゆし
きあるんおをゆるかり
まへんをてまつまかをさんも
をかりてゆるかをきのちの罪

○こめうく　花　人の心むきのこまやかるとをみえ
をかるをかをかるまりさ心をもるをり
細　巨也　巴拔　大やうよとをとくるよ弁をかるを
躰也　かりをきる人ハ大君のをる也　素の心也
○ひやのれをさハ　弄　中君のをる

○心ゆるさん　弄　うをきを人をとよハをとりをうを
あをりをひゆをくさ心をるをうを

をのはをまをもをるさはをさをど
をうをるのはあるさ海かををうを
をふのをりかふとのをひゆ花
かみをのをるをんをもをるかく
をうををををうをるをどをつき
かををををかをるをれををる
もこかをくをををかをるかを
かをうををるをんのをををうをを
かをのをいをををきをんをををの
をるをハをををををかをのの
かををををゆをををんんのをを
をのををををををかををををを

○まれまれ　細　美しかるべきもの　しかるべきものとて
尼てやすらへ　さやうに　なり　兄弟の心とて
あくせて　ひろく　なる也

○あのうしろ　細　中君のかのうしろ　なる
浮舟のうしろ也

○京よりのうしろ　細　奔り　詞

○中将君とて　也　浮舟の母也

くしてかの　なりたる　とて　ときめい
いとてんづくるきけくし
ハ人てていでうてんとこれ思
なつきあどころうちよこひ
らづなさてのつみでよのう
しのことをつのあなつて京よ
このうなんといえて也ど
んげててうけう面うしこと
のすぢかうと　こえのまざかる山
ざとどもしなるば　こうこ
のうこと也なつうなどちて也
まうこうはねのまいてさづい

○さうやわんと　細　八宮ハ我ハ子とハ知り　なる也

○あひるく　支扶　浮舟君ハあらるくこうなて其
のう大うこ出家よりなるこうこ

○くしくうる　支扶　中将君ありうてその後受
領の妻よりし也

よう母のうしろ也　なるべ
うわうぶうもうをいとこのびて
うろうさなどふものなる也
と　ろうんも　なるぶうもうよ　ぬど
とうんうて　なるもうをさものわんん
とおがとこのわうもうふわい
なううづくものしさやうよ
おがしなてみとを　なんびいて
こうおうなうおいふくうれこと
よおがしうてやどおうるひど也
よなうこ也なるまうをつたあく
おりのてえさづこなるなる

○二年のかりて　或抄　奥列の任果てのかりとも
ときこゆるなり
○その君　万水　手習君なくさいはまりまとはと
と父宮と母の中将とせともちりぬかめうと
のおひたるなりと

○さてよひちよ　細　初ハ陸奥守なりしを今
常陸なりてくたれる也

○うの尼やよハ　孟　中君也

○うの君　孟　浮舟也

○文ちなん　或抄　弁の方への文よ也

○さゝハまとよ　或抄　八宮の北方と怪よ
さてハ大君似るといふも誠なるべしとこそ　芝丸刊

○むかしの　万水　芝丸刊

○くもとなん　或抄　巴抄　八宮の四子分てハなくと
○ときとハ　或抄　ときといひつハ上よハ及ハと
ついてなく

ゆくのさみのうらのたちより
よなうなりあんなりいとうて
くものあるがかりきおどそ
中ぬきふとよなんうとうぎをて
あるとうぎきるらくなあき
ら名なてさうばまとてもも
あんなんどやと思ふらで
きあぜのはまひのひても
あまさんんいきるる国までも
ふぜひきうまりきるあるを
ずまんなハぎうきれどうてさん
よてハあるれどぎとうくる

○母君ハ　或抄　浮舟の母中將君ハ八宮の北方のめいと
弁とこそるれあといふを草子地より註せり
○弁もこそるれめ　弄　浮舟の母中將君ハ弁ゝ
めい也　弁ゝ羽

○かゝくよ　或抄　弁をつゝ〳〵ゝ中將君も陸奥
〳〵ゝうるとゝ又ゝのまゝも弁ハ柏木のゝこのこ
ありつきハとゝゝ〳〵きとゝ

○京より太輔ゝ　弄　浮舟の君ハゝこの女房也
或抄　請抄浮舟の女房とありさとゝそ但中君の
女房ゝ此名あり中君の女房ゝや
○うのはゝそゝよ　細　八宮のゝ墓也

○すゝゝのついて　或抄　ゝ墓ゝとゝもゝれゝこんつ
いてゝとゝ

○ゝゝをとゝれて　弄　芝ゝをとゝれゝる也

○心わゝとき　孟　弁ゝゝる也不弁ゝゝ不ゝゝゝゝゝ
芝ゝの心ゝゝゝゝ心やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

このゝゝをとゝるゝゝゝゝゝゝゝん
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○木うしの　細　景氣類うしとゝ

○こふるゝ　河　木蜩　てゝの類を
花　木蜩ハ木よつさゝろ虫の名也
弄　蜩　竹浪切斑身小虫也　玉篇
○宮へとゆりく　盂　中君也

○やとり木と寄　芋也　細　昔の名殘を只ハとハさ
ひゝろ〳〵とゝ惣而薫ハ一生をとり不るゝ〳〵ひ
ゆゝ東坡詩吾生如寄耳といゝてゝゝゝ
くゝゝゝさゝゝゝゝゝゝ
盂　是より巻の名也

○あきゝろる寄　弄尼也　細　あれゝゝをを何
とゝゝゝて一夜をもゝゝ〳〵ゝゝゝハきゝゝゝ浅
ゝをむゝゝとゝゝゝゝゝゝと哀ゝゝゝゝ
○あゝまゝゝゝゝゝゝゝ　盂　弄也
○いさゝゝの支扶　ゝゝ返寄ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○目ちるよるゆう　細　文の羽

○峯のあさぎり　河　くりのくる峯れのあさぎり
くれとれとなりひつきせぬ世中れうき支テ
細　いとの字なりろ〜都ゝそゝ晴〜〜と
○ゆつゝゝゆ　或秋　芝の多てm物語りさんと

○れゆゝ〜　万水　宇治の寝殿を寺ゝるゆんゝゆも
中君のゆゝ〜ゆ〜てハと

○ゆゝゝさ　或秋　寝殿を寺ゝせんゝゝきてなか
せゝゝゆゝハ弁尼のゝゝなりせゝきゝと
○ゝゝもつきゝゝ　白宮の羽

○きゝゝや　弄　草子地

○ゝゝゝえん〜　巴秋　中君の白宮を

○ゝゝゆ　細　白宮のゝれゝ〜浮世白宮ハ尺
浮ゝ〜きと

○山里乃　弄　中君の文れ羽

○さやゝゝて　細　寺ゝゆて〜ゝゝゝ〜〜
○てさゝゝゝ又　河　いゝゆん岩かの中よりよハ
りハ世のゝさゝゆれさてこさん　巴秋　又五

とゞぐあゝゞの行てゞ〜ゝ五て、
尺ゝ毎ハ文ゝハ日ゞゝつゝゝゞと
ゝゆて〜ますん山里ハ和〜行
ていとゞぐんの物ゝゝよまゞひ
行ゝゝ行和ゞゝも多ゞゝゝん。
〜このゝんでんゞゝゝゆゝゞき
とおゞゝゝひつを行ゝゆき。
行ゆ〜行てゝハゞふゝ
を事もの行ゆ弁の尼
ゝゝゝゝべきおほせごとハゝゝ
ゝゞ我ゞゝゝゝもつまゝゝゝき
行へゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

行ゝんとの行もゝゝゝゝらまに
ゝゝゝゝん世ゝゝとゝゝゝを
ゝゝゝとゝゝん行ゝゝゝゞら
ゝゝのゝゝゝゝゝ行ゝゝ
てゝゝゝんゞてゝ行へゝ行ゝ
ゝゝゞゝつゝゝゝゞゝ。
ゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝ
行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝこゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と思行へ〜をゝゝゝゝゝ

帰住不定なれとさすがに寺に入るを一ゑ
へうんとゝ
○いろもさくへさ　或抄　いろうもさくんやう
うしゑへとゝ

○くくさ　細　白宮の心也

○物うとゝ　弄　て草ともとゝ
花　秋の野に草のくもくさ花ときかるに出
てきもの袖とゝ

○ときのを　或抄　ときのいとをいて

○かゝる出ぬ哥　白宮也　弄　ちのときき両説あり
ちのとききとハかゝる出ぬ物也ゝ又云ちのときき
るりいろへさるいまさ出ぬをいとゝ五葉後同
中君の下に物ちひ行とゝえんしゑ哥也　芳心へ
のるまるり　巴抄　まるくハ芳ゝうまるく心也又
芳心とゝるるうまるくと云心ちゝれは不及ち
○るつくきかゝの　細　白宮のゝ心也

○をゝくくに　弄　中君懐妊の時分也
○ゝ出　巴抄　哥とゝ出ゝて

かのるゝとめんすりふあゝ不ま
ゝくまりひ行をいふもさゝ
あさ海よりさをこ海ゝをる
あゝぶるんときこ行くあく
さゝきもあされむつびゝ
とん行ひあゝゝゝ出ゝるゝ
ひよゝゝあゝとあゝをゝや
うゝあるゝゝゝ出ゝゝあ秋の
中よゝ花のゝるゝふてをゝ
いゝくまひくゝ行くゝゆあゝ
あるいゝきゝゝるも海をゝるゝ
ゝゝ海のをゝるゝひようち
るひさゝるゝゝのゝるゝとゝ
ゝゝ行ゝ出ゝ哥ゝ
かゝるゝ出ぬ物ゝ
ゝるゝ出ぬ物ゝ
ゝゝ行ゝ出ゝ
ゝゝ行ゝ出ゝ
ゝゝ行ゝ出

○秋ごろの哥　中君也　孟　白宮の哥ハ芦をとうろ
ごろごろてあるこゝつ世哥ハ六君ゴ心とうろ
さわるようなりてよめり
○我がひとりの河　大ごの我がひとりのごろ
なくての世をもうゝ人ごろる

○うゝかるゝて　孟　中君のやうなあれハて芦
ゴ心をもるるあと白宮れ心也

○うゝひゝて　弄　お花の時分ゴあゝしい
きうゝくさき出ぬ白ひやるるうゝ

○花の中ゴ　河　不是花中偏愛菊此花開後更無花　元稹　西宮花大臣庭前霊物降居樹上
詠前遊小児詠此詩教作者之本意盡字兼請琵琶投秘手曲小児醒唐廉承武之霊也投上元石上流泉曲又天人琵琶をゝるゝハれ芦
の物語ゴ有ゝ　弄　るゝゝのゝこハ品宮花府
るゝ宮るゝねゝのまるれハゝとゝいるゝゝ人し

○るゝるゝ　細　赤代ゴハ奇瑞るゝもなをれハ曲
なゝゝ
○れゝとゝをゝ　花　ゝゝゴハ琵琶とれ琴とゴ
絃の類とハなかゝゝ琴ゝいゝ也
○ゝゝなゝゝ　細　中君也

○心をゝるゝ　細　中君の羽當時ゝゝ心あゝ
ゝゝを傳ゝゝ不ハ浅ゝゝゝゝゝ我ゝゝゝ
ゝゝゝるれゝゝ詩道如此也尤殊勝の羽也

強ゝかいゝゝ人間ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

ゝゝゝゝ野ゝのゝゝゝゝゝ花ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ゑのはひとゝは　或拍　白宮の羽也中君ゝと
箏をひきあはせ給へゝ

○むしのこゑ　細　中君の羽故宮ゝ物ゝと云也

○うゑゝゝの　細白宮の羽
巴拍ノ琴をとゆゝせて也

○世ゝゝゝ　細　六君也

○ゝの中納言　花　中納言謂誰人故可尋之
細　蓋也花鳥之不審如何
或拍　中君の心ゝゝ蓋ゝゝ云羽也

○ゝの君ゝ　細　蓋ゝはゝゝゝゝゝゝ世ゝゝ
ゝて蓋ゝはゝゝゝゝ

○ゝんゝゝゝゝ　巴拍　琵琶ハ黄鐘調也ゝゝゝ箏
のゝ盤渡調ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
引ゝて黄鐘ゝ合ゝゝゝゝ

○いせの海　河　伊勢乃宇義引　支与支江名安　支尤
会一也保加安比余名乃利曽也清末安二年中加比
也比呂波安二年也引多末安也比呂波安二年也
花　伊勢海八律の奇也盤渡調も律也平調ゝ
不可限ゝゝ郢曲の家ゝ可尋

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○二てろ　或抄　白宮のうとを廿房とものこと也

○ろちのうく　孟　中君のうり

○又ろうるまり　細　宇治へろうぶさ心の有也

○のとのよ　細　六君の四方也

○うるまり　孟　夕霧の白宮へまいる也

○とくしもろる　或抄　白宮の行

○あるうこ　或抄　二条院の東北対より白宮まい

まいりまへいて東のほうるくし

○ころるうるさ　細　夕霧の河内院と八二条

院より六条院の四後へくるらこと

○四子こと　也抄　夕霧のゆみこち也

うらうしまりてやこうりるを

いでおもうまるよこるまりて

見ばこくしまるうこ海で

ありよいまつるづこ

でおるこよりおてこいん

しおこるてこ船をかどいば

みんとうで日こくあ待も衣

まるあどいこの四後こ共

すうきこおてやて行つき

きこおてあおこもれみ

ばこうめよまりあよへども

いこ船へ行つるこおつ

○ゆくへも　万水　六君よりおとる中君の心也

○くものそらさて　孟　夕霧と也

○さとさとる　或抄　夕霧の子也　女房達の子也

○さくらの　或抄　女房とものこと也

○みたれもの　細　中君也

○さうしのもと　或抄　宇治のもと始てもてきた也

○もとの心やすく　孟　夕霧の子の躰をなれハ行宇治の中君のもとへ

○年しられか　弄　二年卅巻にてしられる也

○正月の　弄　董廿五歳の正月也　早蕨巻の年にて次の年にる也

○例のゆく　細　中君誕生迄の故也　去年五月よりの懐胎也

○ささのアや　万水　白宮の母后明石中宮より也

○うて三年より　弄　中君より白宮代りいろあ
ぶりより三年也

○ととろの　細　白宮の心さしより也

○岸　切りて　或抄　山産の切り也

○いろより　色人　万水　芝の心也

○さろ八世二宮の　弄　うてさきあるいしもも藤
つぶの花れれ眼よりそのひさりし也

○ふうろろ　世抄　後見ろさう中く天子の品ふよ
いきぶゆゆくろくしさく

○ふくを　弄　何作物所
すのろろ　細　国の母より物せつろ朝廷
のメ何事も一事有ろあるとハ国くの母よ

さらもてこうさらあるはそうしたいづくしあ
りしてあるもおまりもえまうで行らで出てでいのうみども
せうをあるろぶろハ世ろよのはあ
めぎでこのどろよりてよの
なろいのぐさいとあるのてしたろ
づのるみどのいろろいろろ
ゆるかもがいるぞハはろうまさ
しもでもろくめぐるびよろく
もろ世のろちをさあるてとと
ばさろ毋あてばくもどろばべ
こすろうどもあどやろくまつて

おかせていとうまつりさまたる法也

○そのかくよ　弄　蓋のうちひまつりつめ侍へさうり

○例のう　細　蓋は心のをさるれハ也

○此ものすれと　已秋　中君のうまそとと

○うとくものの河　除目直物　賜官或京官除目後
牧筆直物とも行也或除目以後両三月とへしも
有也　先度除目よ系着の事等とうとと故
よ直物と云也其次よ書つれしうとも有也

○石の初かいとの　細　紅梅大臣うとくし行川巻の
暴進のうとくう此物語源氏の大将ハ心右とうとう
或秋　紅梅右大臣　左大将を辞も今もその右大将
左大将よ轉も此人誰とうとう右大将のあとう
よ董　任しうとう

○此うとくう　盃　白宮也

まつりとぐもいとうぐりかしやぐ
てうのうぐかまうりうめ侍ぐ
まわりもれバ年とぐもうう
づひしうとうれぐ思いのとうれ
いぐうのうぐ海のうとうもいでぐ
この世中のうとくもしくもぐう。
きうぐのはいうちぐうようもそ
ものうういあてうよ桂大納言のあう
侍て右大将なを侍ハ右の思い
とのたうもしくもうぐ侍つう
うとうもうくよううびよ立ぐ
あうきうとうぐうのうまもうう

○いとうとうしく　細　中君也

○うとうよ　或秋　二条院の西刹うとうし

○侍うく　盃　乃うとうとうとうとうとう白宮乃
のうの礼受也

○あうてうとうのくい　花　拝賀うとくく来うくハうハ
主人南階よあうとうとう答拝揖議の作法有あう
董新大納言の拝賀よ二条院へ参り給東帯
うとくし然よ白兵部御宮ハ直衣下襲うて答
拝あうあうとうとうとうくハ

○つうとうのくうとう　花　西宮秋　大将初任之時被物ホ
有例とひとり依煩多略之　今案大将初任の時々の
方ハ中女将已下と請して大饗のうと行て禄と
給也白兵部御のうとと饗不へ請しとうとうや
乃ハうくうとうとうてあうりうとうう也
或秋　弁花ういうハ花島ういう大饗し云り大将ういう大饗
不可有河海ういう白宮とうとう者とうとう不可然親王ハ垣
下也公卿ハ大将よりうとうのくハうとうとうと

○六条院にて弄り夕霧の大饗の例なく董の大将のつらさに銀と六条院にて弄也

○忍うの尼こそ花垣下の王卿と云へるは相伴まると垣下と云せいもと云る也公卿八大将ら上首の公卿八ひとりハ也親王八ひとり其時大将のつらさ家ゝるゝ白宮垣下の座に請しらる也河海親王尊者の例可尋とあるもあるも也垣下とハ尊者とハ云へるも也

○此宮ともうり弄るゝ八辞退ゝるれとゝるゝ也

○ゝゝ細 中君も八宮のはせるれハ六君さの尺ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ゝゝゝゝゝ 盃 夕霧の權門ゝゝゝ

六条院にて弄り夕霧の大饗の例なく董の大将のつらさに銀と六条院にて弄也

○忍うの尼こそ花垣下の王卿と云へるは相伴まると垣下と云せいもと云る也公卿八大将ら上首の公卿八ひとりハ也親王八ひとり其時大将のつらさ家ゝるゝ白宮垣下の座に請しらる也河海親王尊者の例可尋とあるもあるも也垣下とハ尊者とハ云へるも也

○此宮ともうり弄るゝ八辞退ゝるれとゝるゝ也

○ゝゝゝゝゝ 盃 夕霧の權門ゝゝゝ

○ゝゝゝゝゝ 細 中君も八宮のはせるれハ六君さの尺ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○此宮ともうり弄るゝ八辞退ゝるれとゝるゝ也

○ゝゝゝゝゝ 盃 夕霧の權門ゝゝゝ

○ゝゝゝゝゝ 或秘 芝の大将初任ゝ慶賀ゝ

文中君の平産とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

聚贈盍可有志報云恩同脩孟恐喜新深況衆官
恩余怖恐然極即纏頭白細長一重襠一具安悉
令道出門道傳報賜禄

○ゑやのなまえ　弄　白官のゝ

○ゆとく　花　粉熟ハ五穀と五色ようようとそ粉ゝ
さて餅よるゝてゆてゝ芽葛とうをそうめゝを
て細き竹の筒をて其中ようゝとゝ入てたゝ
ときてつき出して其をゝ双六の調度れてゝく
まるまゝ也　うなゐの物語　れ侍とれ乃　白くようまゝ人
のれ者ゆゆゆゝきまいゝせゆそれようちつきで
ゆとくまいれり　細　黙心也節會の時も餓鬼
とというゝとゝとゝるもの類也

○ささいのゝや　或抄　明石中宮也

○宮の太夫　細　中宮の太夫也

○宮のゝめて　巳抄　北門より白宮のゆゆ初てゝれハ
ゝて也

○大いとの　細　夕霧也

○ゆゆゝゝと　細　中君也草子地也

三年ゝとこの出ずいろへぐきゆまてれ
むゝくるどうゝくゝくゝぐ出び
やゝかゝかゝ出ゝまでゝこまゝれ
いゝぐゝとめるれめゝゝろゝいゝふゝみし
まゝゝやの出ゝへゆゆ出ゝゝのゝて
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○くさ人　或秘　其人の心也中君の四子出きたるを也

○又くらの　万水　中君とゆうとのせてきと
ひとされかうれさと

○なるかの宮　五　廿二宮の四女八家屋の廿四

○又の日なん　万水　廿三宮の四をきさ此翌日其人の視
言めりしるという

○ふることの　盃　其人八ふることの心也

○なかりしかるる　盃　四門の四心也

○ふることく　河　速く

よはもそてもそんはそくぎ
ようるふく者ごくこ海
りくさ者どものありまこ
ぎくさもやくたんおあり
くさ人ものびて於の是ば
いくぶかくぶ海ちをどく
やかりん又ものはそくぎもいと
をろかりこりかくちいちち
おしきれど今ごめうの心をさて
とおるかよいとうまるもある
くてうの四の廿日わまわるぎ
ふるかのくやの四ゆぎの事あて

花　光孝皇女寒姫　忠仁公ノ子多
皇女源朝臣　頼子　通貞信公　醍醐皇女勤子内親王
配右大臣師輔公同皇女雅子内親王　康子内親王共
配師輔公同皇女靖子内親王　配大納言藤原氏卿
生二女詔子内親王　配大納言源清蔭卿後配河内守
楊惟風　村上皇女保子内親王　配貞信公盛子内親王
配右大臣頼光公　今案此本史例皆以脱屣の後
或以崩御の後　二人のみは成行きて在位の天
子ましまし臣下に配とる人まれなる也光孝天皇
寒姫乃外は嫁ぎ給ふ也漢朝は其例多し
其ゆへは尚ゆゆしと云也

○このんさま　平　源氏の夕

○うの女ぎみ　細　女三宮也

○我はまうて　花　是は夕霧ましまさの二条宮に
ものぬし也一条宮はきて居てとうしうの也

○大蔵卿　細　女二宮の母ぎみ也

○うのはらまれ　巴　秋　女二宮のうへ家司なり
ましまし人也

○うのはせん　孟　芝のもとのもとより也

○うまうとて　或　秋　物をとむきうまうとは内に
ましまし也

○心のうちには　細　芝の心也

○いうの人妻　孟　夫君也

ばかりとおもひてしてかいうへのえ
しらぬまに一日のよは夫婦ていより
そむいてこのうのうへのうへをまま
なりをはつうんぐをいまあるを
ぐらいて　をのびやうれいのこと
んどいうんうるはいぐのうまで
うへはうまのなどのことも
ましてこのやうにぐありもする
うてのちはをのびくまのうへは
そうのうちにはうをもとれば
きいうへぐはのこと聞きていうへ
はまうまうへあがあてしられば

○まゝてさゝを　細　茎の私に家へいれんとて

○母人やハ　細　女三宮也

○ゐなゝまと　弄　女三宮のまゝまとうさとゆ
ゆうんと

○ゐなゝをゐうん　巴撫　古き木ハうてをゐうん
とそのゝゝしくつくりて今の殿おゝゝ西ゐなそ
のうへ　女三宮ハうつろくん　女三宮うつろひゆうんと
水　女三宮うつろひゆうん不也

○うつろゝとさゝを　盃　かとゐゐ私の家へいれ
さんと敲門を進ていゝゝと思ふ也

○ゐなゐ　巴撫　平人等同と

○ゝゝ人やの　弄　女三宮也

○故朱雀院の　盃　女三宮のゝゝと念況ゐなゐせとう
きゝゝる也

うちはらひいうぎまつり給
をもあらのあゝちよいとあゝく
くろゝてゝうぐをせゝてきゝん
とうおぼをうてぎゝうきゝあハ
いとうまつきゝこゝまおぼゝゝう
ゐまつまうんでんゆづやゝ給ぐ
くのあへどいとゝゝげかゐんて
ゆんどぎうのあつのうをを
つぎをてつゝをゝ給ゐ　おゐてよ
うろひ給ぎうゝひんぐの
ふどをゐでもやをて給うう
くあゝとくわくまりゝをいあく

人ぐきうつぐ海ふまつゝを
給ぐゝゐ給ゝろつのとうちは
まゝをゐて給ぐおくうちをゝ
うの給うんといぐゝおぐゝう
人ぐくまゝのをぐゝうゐや
ゝハおゐぐゝうんおつまゐ
てゝうのゐりゝよおつゝひわゝ
ゝゐ給つゝゐもゝぐゝの事をうん
きゝゝゝを給ひまゝ　お事信
院のうゝと給てゝのあ人やの
ゝゝをびきゝゝをゝを給ひゝび
うゝを給とうもゝゝる人ぐおゝゝ

○くやんるるき　盃　今上と廿三宮とこうひよう
しつき給ともに芸ハ何ともいはすして宇治の寺の
るをいとさ給るなりと思給也

○心のうちよハ　細　芸の心

○宮のゝ君のいろよ　花　子誕生の後五十日をハいわ
ゝ又百日をとゝくうと云其日儀式ありて餅を
ゝるなり也　河海勘例あり
或抜　芸よりいわの餅を調てまゐせゝ也

じんのふ　ものゝまゝ　ようせ
さ世給事などいかゝ　ぶ　ゝ
ゝ　いと給ゆゝ　ゝ　ゝ
くやしどもゝ給ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　

○心ことあるゝ　細　芸の羽

○あひこちゝ　巴撥　ちひの外ゝの心也
或撥　あひゝさと云羽よりあり　無愛也
○いとあさまゝ　細　中君の羽

○こゝろ　或撥　中君の心

○おくせまゝ　細　大君の心也

○ものあり姿の盃　大君のあくせハ我こゝろあんと

○うちこをこて　巴撥　あゝ君のうちこを活ハ
さうし心なくさよゝ

ゝ　ゝ　ゝ　

○ちゝ君と　盃　草のゆゝしさ

○ちゝ君　盃　草の中君は心をとゞめたる也

○ちゝ　弄　若君と乳母の出たる也一段

ちゝ君　盃　小児の何とゝ物いふ

る也

○ちゝ　巴撥　中君の我ものゝ草の

ちゝ　巴撥　中君の我ものゝ草の

○世のうひこゝろ　細　道心もなくうゝしく

巴撥　わか君のゆゝしかりてとゝめたる

○ちゝ　細　大君のゝ也

○ちゝ　巴撥　廿二宮の御腹の御子出家

ちゝ　巴撥　廿二宮の御腹の御子出家

○ちゝ　盃　草子地也

○くゝめしく　花　これは物語くゝの草のゝを

いふ也作者のこゝろ

弄　世くゝしく也

○ちゝ　細　門もいんしこゝろ

ちゝ　細　門もいんしこゝろ

ちゝ君を　盃　草のゆゝしさ

ちゝ君　盃　草の中君は心をとゞめたる也

ちゝ　弄　若君と乳母の出たる也一段

ちゝ　盃　小児の何とゝ物いふ

ちゝ　巴撥　中君の我ものゝ草の

ちゝ　巴撥　中君の我ものゝ草の

世のうひこゝろ　細　道心もなくうゝしく

ちゝ　細　大君のゝ也

ちゝ　巴撥　廿二宮の御腹の御子出家

ちゝ　盃　草子地也

くゝめしく　花　これは物語くゝの草のゝを

いふ也作者のこゝろ

弄　世くゝしく也

ちゝ　細　門もいんしこゝろ

○をゝろゝくさ　盃　これまて草子地也
○くゝりさゝさ　万水　芝の心也　若君を乃給
る也
○くゝきゝれハ　細　廿二宮へまゐり給へきハ也
万水　人のうゝくゝきれハるゝくゝ帰給とゝ
○ありの人乃　万水　芝の帰給ありとゝて廿房遣
の文　羽也
○ありつきハ　河　古今　ありつきハてをるゝ人
梅花ありとやうゝひとめる

せちよりづもそひつゝの給ゝ
よもわゝ物をまゝこゝさゝ
ゝ海のはゝこゝをゝとゝてかゝゝそゝ
めやゝくゝ給ひもゝとゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○花の宴　花　天暦三年右大臣師輔公為公卿上首
細　古本右とあり花鳥天暦右大臣とうつされたる
是ハ花ゆゑ〳〵しく夕霧のゆゑ也
○あせちの大納言　弄　似紅梅但別人ゆゑ　祇公可然
愚案
○藤中納言　細　髯黒大臣の息左兵衛督も同
兄弟也
○三の殿　弄　白宮也　常陸宮　同兄弟也
○南の庭　花　天暦三年南庭藤花下賜近臣座
○うらうらてんの　花　天暦三年軒廊東設樂座
或抄　是ハ後涼殿也藤壺の南にあり
○宮のゐさとり　弄　廿三宮也

○さんの殿　花　天暦三年右大臣捧先皇賜勤子
内親王箏譜三巻左衛門督執赤笛一管元貞保親王一笛也
左兵衛督將樫箏一面元良貞親王物有奇音　奏各而獻之
今案天暦三年の藤壺ハ九条右丞相の
ゐ女也延喜ハ門ゐ女勤子内親王ハ則九条殿の
宝ゆゑ成ぬ　是よりて延喜の勤子内親王の
ゆゑ也ゆゑ箏譜と奉ぬ　しかるに今九物語の
六条院の廿三宮ゆゑ奉ぬ　琴譜ゆゑ也
河海の諸抄ゆゑ也
○笛ハ夢ゆ　花　柏木の右衛門督の笛也

○大將の笛ハ或説柏木笛の上手なりしゆへ
まこも上手なるまこもと也

○宮のやうこうゆとく 花 天暦三年沉香折敷四
枚紫柤甚坏土器銀様器供ゝ有粉熟有赤漆
火炉銀銚子 寛治五年万壽元年天盃用
瑠璃ゝ盞
○あのゆ〳〵こゝ 河 藤村濃与數

○ちろりのやうき 河 銀楊器 一本様器 或藥器
親行説 盃 四方膳ゝの事也

○兵衛督 或説 鬚里息玉ろうの膳也

○大臣ちうてハ 細 天盃と毎度ゝ上首ゝ行
ちうと親王の中ゝハめうしをすゝとて大將ゝ

いうしぐゝ行大將のおとゝ
で世ゝなさねのごゝハうさ
て行ゝ麿ゝ乃ゝ
しやうぐゝかつゝかゝ
おてゝりうくゝ
りうぐゝまゝ
おこゝさゝ
乃ゝ
ぬゝう
のゝ
ゝ
ゝ
ゝ

行ゝ也

○ちうう 或説 芸の辞退しゝくとも天氣も芸へ
とゝありきんとゝ 天盃と行ゝ例花島ゝあり

○とゝとの行ゝ 河 進食 日本記 案之ゝ唯称ゝ也
花 河海説ハ皆今案也一而ゝ也ちゝ
ちゝりとせゝちゝきんとハ不知ゝせゝこれ知也と孔子
の格言もゝれゝ也くゝくゝうとくゝハ是故實ゝ也 但
永延二年三月廿五日小右記云行政六十賀也左大臣起
座獻ゝ盃右大臣取ゝ銚子主上給ゝ盃於行政此間被
仰壽言或青云花歌千秋云 行政又有答奏云 可尋記
ゝうの例もゝれハとゝとハ祝言ゝつきゝうゝ
やゝうんちゝ
○ちゝ〳〵 花 天盃と行ゝ時ハ土器とゝ
酒とうゝてのゝ物也其土器とちゝ〳〵ハ云の
とゝうて後くゝうの階ゝうくゝうて行ゝ前ゝゝ
て舞路ゝ也座ゝうゝて是定ゝ作法也

ちうてハびんかうゝ
乃ゝ
行ゝ
ゝ
ゝ

○こぐうれハ　細　位次るれハ也

○あせちの大納言　弄　誰ともなく紅梅よハあるへく
も　細　紅梅の初てるへく　右大臣とるそハきこう
そさまくそろるや

○此乃やゝ　弄　藤垂せれ　芝宮　按案使大納言の
心とくをるありきゝ大臣の家よりあくせしきき
るへく

○乃やとえ　孟　廿二宮ゝとゝりとれとし無内同心也

○人くハ　巴抄　芝と名付るへくるれハ也

○ゝきの乃くゝの　支抄　嵯峨天皇　潔姫と忠仁公よ所
こうし外ハ或脱屣の後或崩御以後也　上よ記と

○こそハえんや　河　宴

こゝさゝあるをこゝ也ハゝ
けしとうておてやさ也ちう
ゆるゆ脱ばしどろくからどめづ
りこさまくこぐうわとバらぐりか
ぎふろつき行るなどゝろろ
らるこさまでうみこもるおぐち
乃方間えハ日ものてかるろも
乃ゝんと行りひしぐるのとぎや
とおりしのね行てこのえやの所
ゝ弟をぐじくゝろうげや
えゆろうきるをまつ行てはも
るをおりひるれぬ間よやえん

かもひ行てだそハこゝをえを
ゝんのゝろつきろ光ばゝし
ろとのぐじくゝるもしや
きれどゝろめしだつるど
あろかれいとろやまと
おりひて人ぐろぐにらぐろ
こゝあまとぐあぐうゆのみで
のゝろくきゝそむゝろづゝ
行ぐゝきあろぐかゝこの乃
うろかおります殿ちゝ行
ゝてぐ人の行をゝぐろひて
ゝそハえんやあかやゝそゝぐ

心のうちまで　孟　按察大納言也

○ゆんさいのもと　巴狩　文墨よりて儀式已下ハ
こゝもれゝゝ哥ハ古めきたるもの不書とも草子
の他也

○えんのもち　河才一と云心也二の町とゝりてよひ
めとゝへし

○万代と哥　弄　五上ハ製也　細行未万〳〵もん
〳〵まもるもわさうゝ　河　花香舎藤寒　延喜
ハ哥ゝてゝてゝてゝかれ万代とゝそ白〳〵友陵
の花

○君〳〵ゝ哥　誰　弄　左大臣ゝや　花拾遺集　延
喜ハ時岌垂の友代天人せゝ白ゝ殿上のこの
ゝも和哥つゝもゝもゝ藏人藤原国章　友の花ス
やこのうちハ紫の雲りしけゝるあやゝれもゝ

○世の常代哥　弄　按察大納言哥ゝいて哥の心ハ雲春
もて立のゝゝとゝゝハ紫のゝとゝいて　仮名

○ゆゝ　細　えのゝゝとゝゝゝ也

○ようさの哥　弄　此哥茎也及ハ枝ハ廿二宮のす
よりわり家垂世ゝもと便ゝ

○うもゝゝゝ　細　我りのゝゝゝゝと

ゝゝこハおどいらでくるゝ
たゞやちまし花を花ゝさ
ゆゝをれがまゝてゝのうち
ゝたゝゝゝゝ花ゝゝ
さゝてゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

細　紅梅うすくし

○うすくハひろく　巴紋　哥のきと筆者の畢下也

○あるくと　表紋　催馬楽註前

○あをちもむ　乗　声のゝ也紅梅に似たり但別へ
さくくし　表紋　紅梅と云説ハこゝより出来たり

○花のゆかいとの山七郎　巴紋　夕霧息女不知

○あるきさゝ　細　選御也

○ゑやのゆき　細　廿二宮也

○さゝ　巴紋　廿二宮の山送りとゝ皆そのゝ廿二宮と
山奉公として心也

○ひさゝの山車　乗　廿二宮の山車うすくし
河　底山車　糸毛　金造　横梅毛　網代

○こゝねつゝ　乗　あるゝ金のゝ物ゝゝゝ也

ゝゝゝ

○あしろ二つ　世挽　下〻也

○本末の〻〻　細　茎よりのれじく也

○〻て心やすく　万水　茎の心也三条宮ものゝ也

○こゝろとり　盂　茎也

ぞ丈わづらふ人は世にすくなく
八人つゝきうゐ人世にしるのか
しらぬ人も世にをのおのそゝぐ
の世てもんかもるかとうれしと
きゝ　ものたべ乃ゝくおどいかぎ
りなきことゝとけうき世おう
てゝうやすく生まれてん
ちう行よいとおうまぎふかうす
さぐやうふあてふ志めやあてゝく
ゝとんあらうかくおうすれば
すゝ世のなどうちかしかぐう
ゝこゝろとり世てうく　物

○ゝうゝうの　盂　大君ぢる也

○此世ゝそい　細　茎のわまうるる心也

○北日あまり　或挽　四月北日あまり也

かうあふしうこの世うもとばれそを
わるあるをまぎらくあうかく物
のをうひくやばのもとばこの世は
ハるぐさあうねけべうはるぐふうう
佛かのてゝそハかやしくはう
うもうあうのなどとあのひく
ひとあうくあうくおりひうあれ
やしおりひつ幸のいうぐう
のこゝうをとばいまるうう賀
乃まうあぐさこぐきなど
うてゝうあまわのなどふ志い
のうぐへおりうばうう世うの

○きいの行木代　弄　多作法寺を建て又宇治賞
ゑくろ法也　細　まゑ弄ゑ奇ゑあり

○女車の　巴秩　浮舟也

○うゑゑの　万氷　矢いゑ　ちこゑゑや

○ゑのゑを　巴秩　ゑと多をゑの人ゑゑて也

○れゑゑ　或秩　業の川供也

ゑんぐゑ　ゑんぐゑ　ゑんぐゑ　ゑんぐゑ　ゑんぐゑ　ゑんぐゑ

○れいしの人も　弄　茗の供ぬ人

○馬ともひきさるを　或拨　引避　又引下

○此そんてんハ　細　新造るれハ也

○あらーこあらろ　或拨　簾るそれハ格子とあるそれるくし

○れそのるれハ　世拨　鳴也

なんといふ世話ものの人も
ふりさめて　ちくしてうる
すぐこうもなるまでなをもひ
やろかんとうつぶやひ
てじまどを引さるなくて
こまりつぶろうるいい世
らうのめーのはまめぐしる
このそんでんハまぐあつ分て簾
もあるどおりあらんばのそ
ろよべてらうしのあのり
のうきうあふぐのおしばひさ
をまてをそうさあるさ乃ぐろ

○ありて　世拨　ちくもかりする也

○あるいとろ　盂　浮舟ろり尼君へ也

○ゆあるの人よ　或拨　努ゝと年尼ゆロうあるる也

○ろうさ人の　或拨　浮舟世房也

○こそん乃ま　細　ともあるく人へ京るれさろ母也

をきてうおらすあるとみもおり
でおまるそふせうこてく
やしでなるあるく人乃おるをと
れぞかどあおいするなるべし
きみらるゆをうまてまるひ
つうりあるのくまるあり
のるのあるまるるるるる世
るてまるまるるるるる分て
まやくあるる世るへまるうとい
ものるるでるるるまなんと云
いるるるるるさ人のあるまるり
てどれまあるるるるん乃

○又なとうひう　或按浮舟の乳母なるへし

○うゝしあハ　万水　手習君の初也

○きいのて　或按　浮舟の女房しものゝ也

○ゆひ出る　細　大君は似う

○あつさとつて　孟　浮舟をとりて車より初る也

○車ハうく　花　是はうて其の車はとりの時ハうち板
しゆ物とて車のうへ板とをんとをはりて上物也
細　うはうち板なるの用意なるへし

○あつ乃て　河　良見　うゝ乃乃也
或按　やすらさと云初は同心やすらさ也

○うすうす色　花　薄青の少濃なる色也　夏のきぬの色也

毒なりはこのやりとかれてやすしみはてあびらんいはなりはてとやうとうまおやゝ
わらはるこうちとすれとうこゝなのあまてわやうはるはいのまいはてこのうさぐ
もおうとあくはとうとうはまさてはいづこのわらはやうべさうしうちをはていはつまし
ぶかはるをこれはまづうちやうはいやうはやうはてはうはなはいとうはりはいはるべし

あつさをはとうちうれて
はいはんはあはてこうはりはて
てはのはけはまつはんはるは
車はうくはるうちはうはるは
をこのんはいやうはるはは
つはていはるはいはやうて
ゝはうはてはうはんはは
よはてこうははうはうは
はりはうはのうちうはうは
はのはうはうはうはは

きよらをとめ　細　人々のひしも

○ゐ足川の河　泉川　木津川と云也　日本紀に排川と
あり崇神天皇桑矢此河と申して排戦有り故也

○東ちと　細　東国の道と云へハ南都の道をとハ
やまとさと

○ひちと　細　常陸前司ひちとあるを
ひちと也

やまとのおりしておもこ海よ
ひらてぞうひかつのかさもろ
しぞふあがとうつ泉川
のうかとうもまとかくつい
いとおそろくとんあうつきこの
きうこさよいかのまくふ
ぐうりしあうくうぐわあさ
いかづまじを高へいづこうおそう
かうんあでふうしてうとも
おりひうこいのあろよ三ハ
をとも世でのまうくうのを
さうあうぐうろうふあうぞ

○あかうさ　泉　手習君の女房美代句ひとと
あうろ也

○老人　巴掖　浮舟の供ス也　或掖　乳母

○天下ス　巴掖　あめのした

なでもいさらあかいてくらい
乃こどまとふあてありやうく
とうふまでうまうまこ拾へで
人のもうひ世でそあをとうでそ
乃さあつようさ人ああつ
やいうでうさあのうしとれあ四
ちみ乃ちさなまふあん之
人まとよああでうの与ある
や京ぐハあをいとこあぐふ
いまあうしれ世下おいうぐさ
しあぐいうしうどおづまとく
うろうさあのうあうえあ世

ちひ色青ちい　盂　尼の衣裳也

○ちのを活くる　細物うを活くる也
○これちと　或按　是ちれと之菓子のる也

○ちちちん　万水　茎の心也上蔓しきる茎といて

いで白ハざるときこのわま茎
ハをもわるくるほふおらすれば
きくだくのあまかるとだ茎
わをわびとらでいたきちくよ
ぎわるやおでかあわるちわるさ
のをのこちわるちるそはいを
きりを活下そおきだちう
つきてきいちぐ白ちうを
おでてものを活ちるこをおで
おをでおきねばちりてそう
おでやのあやおちくこを
きちちわこちちのふちふく

○ちちちき　河退也
○これちちち　或按　以下茎の心也

○ちち今ハ何ちち　或按　浮舟のる色大君ニ似ちる
ちちちちちき也

てきぎき活ちでみゆちくかちて
ちをそちちりくちちをこれち
まちちきはのんぐを活ちを
めてちちこみちちきめて
なちもちちあくまでちあつあ
活ちでおりちをかでかもん
もちまちばわまりんよりどちく
までのちをまんこちちおで
いまはかわでりをどれてちを
ちもおきんかれどかくきち
ぐくあのどちよゆちくもわや
しきちちちあまちこハ

○此ものゝ　或抄　弁尼芳へ也

○此君と　万水　弁尼ゝ心也此君とハ千智君のゝ也

送る也

○ゝるゝゝゝを　或抄　芳へ奉つゝてゝ弁尼のゝ人也

○ゝゝゝゝゝの　巴抄　弁尼浮舟のゝゝ也

○ゝゝゝゝゝゝ　花　弁の尼君ゝゝゝゝゝゝ

○あの君と　細　弁尼とゝろゝとて　芸の名ゝき
行ゝ人ひゝゝる也

○ゝゝきを　細　大君也

○尼君のゝ人　孟　弁尼人の返答に声々し中君の
を似ゝゝゝ

せばいまゝらぬ紅ゝゝゝおまゝ
とゝぢいてゝゝぢこゝゝゝゝ
めこまゝゝゝいとゝくゝゝ
ゝいとゝゝゝまこのゝぢゝ
ゝゝゝゝまこゝゝくゝぐ
ゝゝゝ人ゝゝゝゝゝゝ
どこまゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれとゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○これより口ゝゝ　或夢　浮舟ハ受領のゝ子也受
領ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ也

○ゝゝてこれハ孟　八宮のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○世中よゝゝ　年　芸の心浮舟ハ
ハ世よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

或抄 去宗のうんさいとう尺牘ハ心りとすんとく

○人のうめ 細 弁ノ用意也のうき詩よを推

う

ぶいまでうのてうしゃのごう
をつうくうくうく

○うゑのごろもの弁　廿二宮へ進のまゐりのひとり也

○うちつけに　孟　故八宮のるを初めて知

○くゆるしまと　或抄　毋のまつりきされハ進の

これはまゐりまとくやてるひとのるしそやうさ

けうとくよこそ行るれあるこん

はしどうのとろのひのやる

まゐりまるぶとうのひのやる

やりびんあく思ふへつそく

るんこまこん世ゆるしし

をまこの月のまでくん

ろうはるゆきろうのやや

どうまくしうびるもくで

るめはきらひをゑ○やるゆる

ゆるるん行ふのそくこは

きるるあてこのびいふう

ものはめをびるあらまるも

○内中ひとろ　細　進のとろろのり也

或抄　進の利

○まとくもハ　或抄　弁尼ニハロくあるんと下くの

るものしものひやーろんとく

○ひとりのとん　孟　毋のるとゆうしと

○うちつをよ　細　弁ろ利

あるのかものは行ん人てとる

ゆおはびらんびりふーのいや

つきろあるもひんをじとて

ちらるめつまどらびあーん

ぎとをとらるまあーじ

いるぶきびうゆのすんを

るくくろやるれちびり

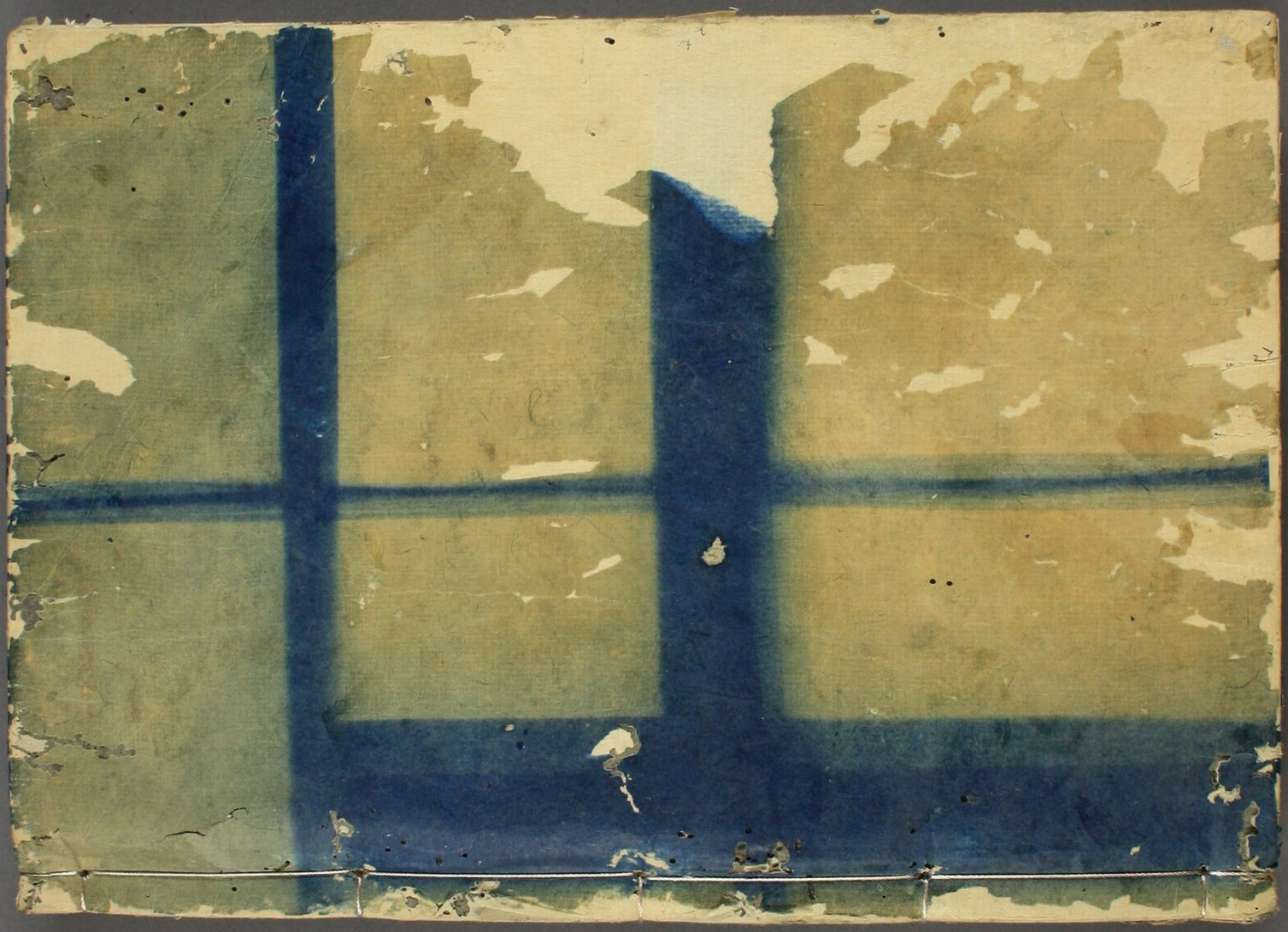
あてるんまろくあひちと

はんハはーとのはへでうり

つをよりろかであるゆちぶろ

まるとうちくひてぶきび

ろうんはんとてびるよ

○ほとゝぎすの哥 芋也 細心ハ故大君とゝもれゝゝ
よりて似たりとゝ
巴扇 鳥ハ君に似たりといふ人あり也
似たり鳥と声もいあて物ひさきの心也
ほとゝぎすと分てとハ君に似たりもあり山路
と分しゝ
河 百葉 夕されハ野辺なる鳥のかなしさ
はたゝきすきるくゝ人丸 同 かりとゝ
春のけ草の根ほとゝきすひもとかす 同
毛詩云 流離少而貞好老甚醜 此故ゝ梟鳥の
一名を貞鳥と云也 或説云杜若とかゝ花ゝ
彼花咲比此鳥なく故也 又八雲抄云かゝ
春日山ほとゝきすこゑまれなるものといへるひる
絶をこひしゝいへりまたほとゝきす春のとゝ
源氏物語ともあり是其鳥と難定 但定家卿
不知之とゝ推之ほとゝきす鳥也但未決

うぐひすのこゑもなつかしふるさと
やとゝぎすをまつとしてこそ
ゆるぎなくなくなのやまの
はをゝてこそ